ラグナロクオンラインSS第1章 Girl Meets Girl！！

梶原 ？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラグナロクオンラインSS第1章 Girl Meets Girl!!

【Nコード】

N13570

【作者名】

梶原？

【あらすじ】

ある二人の女性が出会った事で始まる物語。
一人は守る事を決め、
もう一人は自分の運命と向き合うことができるのか。

クリス「そこまで固くないわよ。鼻でもほじって見てちょうだい。」
エリィ「まじめにやってください！！」

プロローグ（前書き）

この作品はラグナロクオンラインの30年後を設定として書いています。

尚、オンラインという概念は存在しません。

その他、作者独自の解釈、オリジナル能力、スキルなどが多数出ます。

ネタバレ無しの設定集などもありますので、機会があれば投稿します。

プロローグ

ラグナロク サイドストーリー 第1章 Girl meets
Girl!

プロローグ

はあはあはあはあ・・・

ここは魔術都市ゲフェンより少し離れた場所に位置する洞窟内。
薄暗く、べつとりと肌に纏わりつく感じがたまらなく陰湿な感じを
強調させるかのような湿気。

はあはあはあはあ・・・！！

そんな洞窟になぜ一人で来てしまったのだろうか。

息を切らし一心不乱にかけ回りながら一人の少女は思う。

ああ・・・全てはあの人が悪いんだ・・・。

ゲフェンの街で知り合った一人の感じのよさそうな商人さん。

今では結構貴重な部類に入るであろうブルージェムストーンを良心
価格で売ってくれた人だ。

・・・よく考えたらこの石もどこで手に入れたんだろ・・・

その人に「退魔師の修行場ってどこですか？」と尋ねたら

「その辺はよくわからないですけど、私の知り合いに一人、ここか
ら少し離れた洞窟で修行をしていた、なんて退魔師さんがいました
よ。」

と、教えてくれた。ついうれしくなって舞い上がっていたので、あ
の後何か商人さんが言っていたような気がしたけどさして重要そう
なことでも

なさそうなので流してしまった。

・・・もしかしてあれがまずかったかな・・・？

そんな事を自分の頭の中で何回もやりとりしながらとにかく走る。

はつきりいつてしまえば、まだ自分のレベルでは早すぎたのである。意気揚々と洞窟内に入ったはいいものの、この独特の陰湿な雰囲気、何かモノが腐ったような刺激臭もするし、何より洞窟内は暗すぎて前がよく見えない。

足場も悪いし、入って10秒かそこから帰りたい気になってしまった。それでも勇気を振り絞って奥に足を進めたものの、このザマだ。突如目の前を襲ってきた黒い影。

恐らく昔は人だったのだろう。体中を腐りきった肉体で覆われ、何年も薄暗いところいたせいなのかはわからないが気色の悪い緑色の肌をしている。

何百年も昔に生き絶え、それでも現世に未練を残し、その変わり果てた身体に魂を縛られた人間。別名グール。

突然襲われた時はあまりにもびっくりして大声を出しそうになってしまったが、ここで引いたら退魔師として失格だ、と全力で今にも泣き出しそうなのを我慢する。本当は目も合わせたく無いが、一度大きく息を吸って、小さく吐く。そしてゆっくりとその視線をグールに向ける。

私だって・・・やればできる・・・！
そしてゆっくりと自分の頭の中の精神力を集中させる。

よく魔法などを発動する際、呪文を詠唱するなど、言葉に変えて自分の精神力を集中させる、という方法がある。

そう、それは悪魔で方法であって、集中さえできれば特に呪文などはないのだ。人によって集中方法は色々あるが。踊るとか・・・。

少しずつイメージを構成させる。自分の身体に流れる精神力が発動となる場所、己の右手に集中させられていくのがわかる。

・・・もう少し・・・

この集中している間にもグールは少しずつこちらに歩みよってくる。全身が腐っている為、やはり歩く速度も遅く、一步一步歩きたびにグシャッグシャッと人が嫌う異音を立てて迫ってくる。ちよっとで

も弱気を見せたらとても気持ちが悪くて立っていられないだろう。それでも精神を集中させる。

気がつくと、グールとの距離がもうあと一步で触れ合うであろう所まで迫っていた。

・・・今・・・!!

右手にたまった精神力を一気に目の前の敵へと爆発させる。

「ホーリー・ライト!!」

そのスキル名を叫ぶと共に、右手にたまった精神力は目の前の敵へと襲いかかり、触れ合った瞬間大きな十字架クロスのような形となり

一気に爆発する。

対悪魔・不死専用法力スキル。

この世界では精神力を大きく二つに種別できる。魔術を扱う場合を魔法、聖職者などが扱う精神力の場合、法力と表す。

いまのスキルはこの手の敵には大ダメージを期待できるスキルだ。

それに今のは自分の中ではかなり上手くいった方だ。

いける・・・!

そう自分を鼓舞した瞬間だった。

爆発をし、浄化され消し飛んでいたと、思われていた箇所から突如黒い影が飛び出し、目の前の彼女に襲いかかる。

「きゃあっ!!」

その黒い影に身体を飛ばされ、今度は我慢などできる訳もなく、大きな声を上げてしまった。

え・・・? ウソ、効いてない?

彼女のほぼ全力であろうスキルを受けたグールは、何事も無かったようにまた歩き出し、彼女へと近づいていく。

「ま、まずい・・・。」

彼女もそれを悟ったのだろう。吹き飛ばされた身体を無理やり叩き起こし、グールとは逆方向に走りだしていく。

さっきの吹き飛ばされた衝撃で左足が思うように動かない。多分ひねったのだろう。

左足を少し引きずりながらも全力でその場から立ち去る。

自分じゃまるで歯が立たない……。

そう思いながらも必死に出口の方へと掛けていく。とりあえず出口に行つてしまえば追つてはこれないだろう。

この手の魔物は日の光などを嫌う。だから決して洞窟の外へは出ないのだ。

さつきくじいた左足の痛みがだんだんひどくなつてきた。思うように走れない。

それでも走る。自分はまだこんなところで死ぬわけにはいかない。

その一心で身体を無理やり鼓舞する。

あと少し……あと少し……！

見慣れた場所まで戻つてきた。さつき自分が歩いたところだ。洞窟の薄暗さも必死さのせいかな慣れてきたようだ。

もうすぐ出口……！

そう思つた時だった。

今度は出口への道を遮るかのように黒い影が一体、こちらを見据えている。

緑色の身体、腐敗臭。

そう、グールだ。

「う、うそ……。抜かされた!？」

思わず叫んで後ろを振り返ると、やはり奥の方より、グシャツと異音を発しながら迫つてくる黒い影ある。

二体いたのだ。

今おかれた状況を整理するのに数秒かかった。さすがにこの状況はヤバい。

……ここまでなの……？

何とか目の前のグールだけでもやり過ぎたいが、左足がすでに限界に近づいていた。

普段であればグールのスピードなら余裕でよけるであろう。

が、今は満足に歩けない状態、うまくスキルを使って目くらましに

したとしても、詠唱中に後ろのグールに追いつかれてしまう。
万事休す・・・。

などと考えていたら、すでにもう何もかもが遅い状況になっていた。
出口側にいたグールがもう、目前にいるではないか。
びつくりした反動でしりもちをついてしまった。

・・・殺される・・・

目の前には大きくその腐りきった腕を振りかぶって彼女へと殴りか
かろうとしていた。

「こんなところで終わっちゃうのか・・・。」

もうすであきらめたのか、ふと小さく呟いた。

その時だった。

目の前のグールの腕が振り下ろされない。

・・・？

それどころか、グールの動きが止まり、全身が灰の塊となり崩れ落
ちていく。

くずれ落ちた灰が土煙となり、目の前をぼかしていたが、そこに
いたのは間違いなく人間だった。

そして一言

「そんな簡単に人生あきらめちゃダメよ。」

この薄暗い洞窟なのに、こんな希望も何もない暗い場所なのに。

その一言はなんと心強い一言だったか。

今のいままで真っ暗だった洞窟内がすごく明るく見えたかのような、
希望の光だった。

そんなことを考えていると

「ほら、ぼーっとしてないで立つ！喰われちゃうわよっ！」
とまくし立てられ、ハッと意識が戻っていく。

土煙が完全に消え、彼女の姿が今でははっきりとわかった。

女性だ。

黄色いショートカットに少し釣り目な感じの眼、服装は聖職者の格好とはちよつと違うような、もうちよつとラフな感じの服に思えた。

「おーい、大丈夫かー？いきてるかー？」

またぼーっとしていたらしい。

「は、はい！大丈夫です！」

あわてて返事を返す。

「よし、なら早いとこ逃げるわよ！ここはこんな奴らの巣窟なんだから一々相手にしてたらキリがないわっ」

そう言われ、勢いよく立とうとしたところに左足に痛みが走る。

「痛っ！」

つい声を出してしまった。

「ん？あら、ケガしてんの？」

「はい、さっき吹き飛ばされた衝撃でちよつとくじきまして・・・」

「ちよつとまつてね。応急手当くらいならなんとかなるか・・・」

と、おもむろに自分の左足までかがみ、くじいた箇所を手をあてはじめる。

その瞬間だった。あてた手が白く光り、くじいた箇所を優しく覆う。すぐに痛みがとれたのがわかった。

「あたしは回復スキルは苦手ですねえ。まあこの程度なら問題ないけど・・・」

とぶつぶつ言ってた時だった。

出口とは逆の方より迫っていたグールがすぐ近くまでやってきていた。

「あ、危ない！！」

大声で叫んだが、彼女はなんの事もなかったかのように

「どーも回復だとか支援だとか、まどろっこしいのはねえ・・・ぶつぶつ」

とまだぶつぶつ言っている。

「い、いや！今そんなこと言ってる場合じゃ・・・！！」

「よし、こんなもんでしょ。大丈夫？足痛くない？」

「え、足は大丈夫です！痛みは無くなりました！無くなりましたけど！もつと違う痛みがでそうです！」

そんなやりとりをしてる間にグールはもう戦闘態勢に入っている。オレを相手にしろ、とでも言わんばかりに。

「やばいですって！なんか敵さんすごい戦闘態勢入ってますよ！」

「大丈夫大丈夫、落ち着いて。お茶でも飲む？」

「何をのん気なことを！うわぁー！！こつち来るー！」

グールの振りかぶった腕はすでに黄色い髪の毛の彼女の頭上まで振り下ろされようとしていた。

「大丈夫、ちゃんと視えてるから」

「え・・・？」

頭上に頭が振り下ろされようとした瞬間。ふと彼女が右腕をその頭上にかざす（ガードするような形で）と、

その腕から不思議な力場、光のシールドのようなものが出現し、グールの攻撃を防いだ。

そのシールドに当たったグールの腕は突如ぼろぼろ灰になり、その場へ崩れ落ちる。

「グオオオオ！！」

グールにも痛みとかあるのだろうか、大きい雄叫びのような声がひびきわたる。

「回復とかは苦手だけどね・・・」

と呟きながら腕の崩れおちたグールの方へと立ちながら振り返り

「こつちは大得意よ！！」

振り返る回転を利用した右腕を勢いよくグールの左脇腹に叩き込む。よく見ると右手は白く輝いたオーラを纏っている。

その一撃でグールは全身灰と化し、その場に崩れ落ちた。

「す、すごい・・・。」

今のは何なんだろうか。

呆気にとられていると

「ほら、ボサツとしない！すごそこ出口だから駆け抜けるわよ！」

「は、はい!!」

すぐに立ち上がり（今度はうまく立ち上がれる）、出口の方へと駆け出していく。

走っている最中に話かけられ

「そういえば名前まだ聞いてなかったわね。なんて呼べばいい?」

「えっと、エルクレスティア、エルクレスティア」マクレガーって言います。呼び方は何でもいいです!」

「長いわね、ん」

走りながら彼女は腕を組みつつ唸り始める。器用な人だ。

「そうだった」

何か思いついたらしい。

「エリイ!あたしはエリイって呼ばせてもらおう!」

よほどいい案を思いついたらしくちよつと得意げに言った。

「はい!で、あなたは?」

聞き返したところでハツと思っただらしく

「ああ、まだ名前いってなかったっけ。」

自分が名乗るの忘れてるって、結構適当な人なのかな・・・と思っていたところで

「あたしの名前はクリス!クリス」リンベル!クリスでいいわよ!」

彼女はそう言った。

「はい!よろしくお願いします!クリスさん!」

「こちらこそよろしくね、エリイ」

これが二人の出会いだった。

そう言い合ったところで目の前に光りが差し込んできた。洞窟の出口が見えたのだ。

「さあもうすぐ出口よ!がんばってエリイ!!」

「はい!!」

ここより大きな運命の物語が始まる。かな・・・?

プロローグ
完

第1節（前書き）

前回プロローグの続きです。

プロローグ、エピローグあわせて6話構成です。

よろしくお願い致します。

第1節

第1節

「なーんであんなとこ一人で行ったのよー!!」

一際でかい声が店内に響き渡る。

ここは魔法都市ゲフェンという街で、魔法使い（この世界ではマジシャン、ウィザードなどと言われるらしい。）を指すものや、魔術の扱いに長けた一流の魔法使いたちが、その魔術を更なる高みへと伸ばす為に作られた都市で、少し他の街に比べると独特の雰囲気を持っている。

そこら中に、魔術に必要なと思われる？（実際はよくしらない）アイテムや、コウモリの羽、とかげの尻尾など、いかにも陰湿な雰囲気を連想させそうな物が売っている。

もちろん普通の商業も盛んで、魔法使い以外にもそこで暮らす人々、商人やら冒険者ギルドとして生活を担っている人たちも大勢いる。

その商業施設が沢山並んでいる場所の一角にある、この街では割りと大きめの飲食店に二人はいた。

「あそこはいつぱしの退魔師ですら一人で進むのは困難なの！ましてやかけだしてなんて死ににくようなもんよー!!」

さつきから店内の端から端まで響き渡るような声で叫んでいるのはクリスだ。

黄色いショートヘアに、キリツとしたブラウン色の瞳に釣り目、細身の身体ではあるが、腕や足などは女性特有の華奢な肉付きとは違い、研ぎ澄まされた筋肉のような、アスリートの様な体つきだ。黙ってそこにいれば、結構美人の部類に入るかもしれない。

黙っていればだが……。

「ちよつとー、聞いているエリィ？」

肉痛めや魚の煮込みなどたくさん料理が並んでいるテーブルの合
い向かいで座りながら話をしている。

食べ終わった魚の骨をかじりながらしゃべってるクリスの向かい側
に、ちよこん、と申し訳なさそうに座っている女性が一人。

銀髪に桃色を足したような、ちよつとクセの入ったロングヘア、パ
ーマが若干入ってるようにも見えるおしゃれなくせつ毛だ。身なり
はブリストのそれだが、彼女が着ると少しおしゃれ、それでもっ
て清楚な感じがする。彼女が微笑んだらきつと誰もが暖かくなるよ
うなそんな笑顔が似合うような女性だ。

その顔が今は塞ぎこんでいて、落ち込んでいるように見える。

「す、すいません……。そんなところだとは思わなくて……。」「
少しおどおどしながらエリイが呟く。

小さな兩人差し指をツンツンさせながら、半場泣きべそでしゃべる。

「私もある程度いけるかなーなんて思ってた。」

「だーからー！そういう過信がああいうことを招くの！もう少し
で死ぬとこだったのよ！」

クリスがさらに大声で怒鳴る。エリイの涙目は今にも崩れ落ちそう
なほどに塞ぎこんでしまっている。

「まあ、こつやって生きてたんだから儲けもんよ。次からは気をつ
けなさいね。」

ちよつと言い過ぎたと思ったのか、声のトーンを落とし少し穏やか
な口調に戻した。

今更だが、何でこんなとこにいるのかというと、クリスが「ケガし
た時は食って直す！エリイもお腹すいたでしょ？あたしのおごりで
いーからご飯にしよう飯！」と、何とも適当な言い訳で半ば強引に
つれていったのだった。本当は自分が食べたかったただだが……。

「とりあえず……。」

それまでかじっていた魚の骨をペツと空の大皿の上へ吐き出すと

「なんであるところ行こうと思ったのよ。普通に修行するだけなら
もつと低レベルな場所があるじゃない。それにあの場所知ってるの

だつて結構稀よ?」

と、ふと疑問に思ったクリスが怪訝そうな顔をして聞く。

「そ!それは・・・!」

触れてはいけないところに触れられてしまったのだろうか。とてもバツが悪そうに話すエリイ。

「い、いやちゃんと話を聞かなかつた私が悪いんですけど、この街で親切な商人さんに教えてもらつて・・・」

と話をしだしたところで・・・

「あつーーーーー!!!」

突如エリイの背後、この店の出入り口の方から少女の大声が聞こえた。

「見つけたー!見つけましたよ!!」

と、これまた何とも他のお客の迷惑になりそうな大声で叫びながら一人の少女がこちらに駆け寄ってくる。身長は130~5cmくらいだろうか、緑色の長い髪に両端を小さいリボンで結び、頭の天辺にはこれまた大きなリボンが飾つてある。

傍から見ると活発な少女の様に見えるが。どこかで見覚えがある・・・。

エリイはほんの一瞬考え込み、すぐピンと思いついた。

「あーーーー!あの時の商人さん!!」

思い出したと同時にちよつとした憤りを感じ

「何であんなところ教えてくれたんですか!!おかげでこっちは死にかけましたよ!」

と、勢いでしゃべつたのか、若干おかしなイントネーションでエリイが叫んだ。

「それはあなたがちゃんと人の話を最後まで聞かないからです!!ちつさい商人が反撃する。」

「私はあのあとちゃんと言いましたよ!危ないからとてもじゃないけど一人では言つてはだめですよ!つて!」

それを聞いたエリイは半場放心状態になりながら思った。

あちゃー・・・やっぱちゃんと聞くべきだった・・・何で人の話を聞かないんだろうか私は・・・

自己嫌悪に苛まれながら右手をおでこにあて、へなへなとそこに崩れ落ちた。

「おい大丈夫かー、魂ぬけてるぞー」

あー終わった？とでもいわんばかりの呆け顔でクリスが言う。

「そんなことより楓。あんたにもちよつとは責任あるわよー。」

楓、と呼ばれたちっさい商人がクリスの方に向き直り

「あれ！！クリスさんじゃないですか！何でこんなところに！！」
まるで今気づいたかのような口調でしゃべりだす。

「何でこんなところに！！じゃないわよ、あんたがあんな場所薦めるから、あたしが助ける羽目になったの。おわかり？」

楓のおでこを人差し指でズビズビさしながらクリスが素っ気無く言う。
う。

「あううう。痛いです。」

ズビズビと指されたおでこをさすりながら

「うう。私ちゃんと言ったのに」。そこのお姉さんが話を聞かないで行っちゃうからいけないんです。」

こちらの半べそになりながら一人呟く。

「まあとにかく二人とも泣き崩れてないでお互いごめんなさいしなさい。結論問題無かつたんだからそれでよし！」

上手くまとめました！みたいに得意げに腕を組みながら話を強引に終わらせた。

それまで放心状態だったエリイが我に返り、

「そ、そのちゃんとお話聞かないで行っちゃってすいませんでした。」

と頭をペコリと下げあやまると

「いえいえ！私もつい退魔師なんてフレーズ聞いてわくわくしちゃ

つて！本当何事も無くてよかったです。」

楓も頭をふかぶかと下げあやまる。

「あ、私エリイっていいいます。エルクレスティア「マクレガー、あだ名はさつきクリスさんがつけてくれたんですけど・・・」

「よろしくですエリイさん！私は楓！水無川 楓なのです！名前がちよっと違うのはアマツ出身だからなのです！」

「よろしくお願ひします、カエデさん！」

と、お互い軽く自己紹介をしたところで・・・ふと疑問に思う。

「そういえば、あの知り合いの退魔師さんが一人って言っていましたけど、もしかして・・・？」

ああ、それは・・・！と得意げな顔をして

「この人ですよ！」

と、クリスの方を指して言う。

「んあ？」

自分で話をまとめて満足だったのか、もう意識はまだ残っている料理の方へ行っていたのでまったく話を聞いていなかったらしい。

二人の視線を真に受けてちよっと悟ったのか、

「ゴホンッ」

と咳払いをしつつ

「あたしは楓のお得意様なのよ。ほら、今ではブルージェムストーンとか貴重でしょ？それをこの子は安価で提供してくれるのよ。」

「あー！私もあの安さにびっくりしました！」

共感するものを得て、ちよっとうれしくなり声が弾むエリイ。

一方、楓はというと、それは企業秘密なのです！とでも言わんばかりに得意げな表情をしている。

「他にもあたしが普段使ってる銃の弾とか仕入れてくれるんだけど。注文しといてなんだけど、あやしいわよねえ。」

「たしかにあの安さは何か裏がありそうですね・・・。」

二人が怪訝そうな顔で楓を見ると、

今度は、そんなこと言ってもう仕入れませんよ！とでも言わんばかりにふくれっ面な表情をしている。

「冗談よ〜じょーだん」

クリスが軽く楓をなだめているとふとエリイが不思議そうに

「クリスさんって銃使っんですか？あんなに強いのに？ていうか聖職者なのには？」

エリイが不思議に思うのも無理はない。

普通退魔師というのは、役職的には聖職者・プリーストという括りになる。聖職者なるもの、人を傷つけるようなもの（刃物など）は携帯してはいけないという、決まりがあるのだ。

もちろん銃もその部類に入る。

「ああ、それはね。」

クリスが腰につけているベルト、その右側あたりにある皮製の銃のホルダー（普段は上着の影に隠れて見えない）から一丁の銃をおもむろに抜いた。

「これはあたしが所属している場所がちょっと特別でね。武器の携帯も許されてるのよ。」

「これはそこから支給されるもののカスタマイズなんだけど。」
一見するとその銃はガンスリンガー（銃を使う職種）が持っている重厚な感じ、黒々としたいかにも重火器です、というのはちょっと違う

とても軽そうなの、それでいてちょっと芸術品を思わせるような質感、普通に部屋の壁に飾っておいてもインテリアとして役に立ちそうな感じがする。

「これね、普通の銃弾はうてないのよ。ブルージェムストーンを加工した特殊な銃弾じゃないとね。」

ほえ〜って顔しながら銃を見てるエリイに

「この弾を仕入れるのも大変なんですよ！」
と楓が自慢げに話す。

「まあ、元々銃のカスタマイズもこの子のツテでお願いしたような

もんだからねー。」

と、楓の頭を優しくポンポンと叩きながら言う。

「支給された銃じゃ高レベルの魔物には何の役にも立たなくてね、ちよつとカスタマイズしてもらったのよ。」

「その代わり特殊な銃弾だから、撃つ時には精神力、聖職者だから法力ね、それが必要なの。」

「逆に言えば、どんなにがんばってもガンスリンガーさんはこの銃を使えないですよ!」

楓が付け加える。

「へえ〜、聖職者のギルドにもそういう所属があるんですね〜」
と、エリイが感嘆すると

「あら？最近じゃもう結構有名だと思うけど、知らない？」
と、クリスが何でもない普通の疑問を投げかけた。

「え!?!ああ、そうでしたっけ!?!すいません、私そういうの疎くて・・・」

「あー、エリイそういうの疎そうだもんねえ、世間とか知らなそうだし」

結構失礼な感想を言いやがった。

「そ、そんなことないですよ!ちゃんと歴代ルーンミッドガッツ国王言えますよ!」

「いや別にそこはいいんだけど」

よく意味のわからない意地をみせるエリイに対し、軽く流すクリス。
「まあ、とにかく」

銃を腰のホルダーにしまいながら

「今のままじゃさっきの洞窟どころか、もっと低レベルな場所でも難しいわねー。もっと自分の力量を見計らわなきゃダメよ。」

「まあ、今日のをいい教訓だと思って次からはもっとマシな所へ行きなさいよー。」

半ば強引に話をまとめるクリス。

「は、はい、わかりました・・・。」

今日の出来事をまた思い出したのか、落胆しながら返事をする。

「じゃーとりあえずそういうことで。また何か縁があったら会いましょう。」

と、いいつつ席を立って帰ろうとするクリスの上着の左裾をグッとエリイの手がつかんだ。

「ん？どした？」

何の疑問も無いかのように尋ねる彼女に

「・・・お勘定・・・」

俯きながらボソツと言う。

「あれー？ここってエリイのおごりじゃ・・・」

「そんなことは ひ・と・こ・と も！言ってますん！！！」

彼女の容姿からは考えられないような怒鳴り声だった。

「クリスさん自分でおごるっていつてたじゃないですか！ほとんど強引に！！」

さっきまでの彼女からは考えられないような変貌に、さすがに気圧されたらしく、

「ま、まあまあ、落ち着いてエリイ。ね？冗談よ冗談」

と、もう一度に席につくと、呼び鈴を鳴らし店員を呼ぶ。

いくら？と店員に聞き、金額を言われ、上着のポケットからサイフを出そうとした時だった。

その直後からまったく動かなくなった。

むしろ硬直していた。なんか脂汗もかいている。

そしてなんかギシギシと異音が聞こえてきそうに、ぎこちなくエリイの方へと視線を向けると

「サ、サイフ忘れちゃった・・・」

と、額に脂汗をびっしり掻きながら衝撃的な発言をした。

「なっ・・・！」

あまりにも衝撃的すぎてエリイも口をあけたまま固まっている。

実はエリイもお金を持っていないのだ。

「エ、エリイお金ある？」

ものすごく申し訳なさそうにクリスが何うと

口をあけたままクビを横にブンブンと振り、お金もってませんアピールするエリイ。

やばい……

お互いの視線がそう告げる。

その二人を冷やややかそうに見る店員。

やばい……まじやばい……

その時二人の視線が緑髪の方へと向く。

「か、かえでちゃん」

「カエデさん!!」

二人して緑髪の名前を呼ぶと

「すみません!お金貸して下さい!!」

と、二人して地面に這い蹲り、懇願した。その意気の良さといったら……。

なんて情けない人達だろう……と小さいながら思った楓であった。はぁ……と大きくため息をつく

「しょうがないですねえ。今回は貸しますよクリスマスさん。ちゃんとあとで返して下さいね。」

「さすが楓!やつぱは持つべきは友達よ!!」

あの気まずい空気からはいっぺん、なんか吹っ切れたかのような、当たりくじ引いたよ!的な満面の笑みを浮かべ楓に抱きつくクリスマスやれやれ……とまた深いため息をつく楓を見て

うわー子供にため息つかれてる大人って惨めだなーと思ってしまったエリイであった。

自分つかれたことに気づかずに。

そんなこんなで楓にこのお店のお勘定を立て替えてもらい、よつやく外にでられた。

辺りはもう日が沈み、暗闇が街を覆っていた。

「じゃあエリイ、気をつけて帰るのよ!」

クリスにそう言われ、ハツと気がついた。

そっか・・・もうお別れか・・・

ほんのちよつと間だったけれど色々楽しかったなあ・・・

そう思うと、残念そうに、本当微かに残念そうな顔をしたあと

「はい！色々ありがとうございました！」

と元気な顔を見せ、その場から去ることにした。

もちろん空元気だ。

これ以上ここに居座るともつと離れづらくなってしまう。

悟られるわけにはいかない・・・

その場から離れても居場所なんか無いのに・・・。

エリイの去っていく後ろ姿を見送り、おもむろに上着からタバコを取り出し、火をつけるクリス。

ふうーつと大きく吸って小さく煙を吐く。

「これでよかったのかしらね・・・。」

一言、誰にも聞こえないくらい小さな声でそう呟く。

「いいんですか？追いかけないで。」

楓には聞こえていたらしい。

「エリイさん、なんかとても思いつめていたような顔してましたよ。

あきらかに自然な笑顔じゃなかったです。」

楓は商売柄か、人間の細かい表情を読み取るのが上手い。

もちろんクリスもそれを感じ取っていた。

「触れてほしくない過去もあるもんよ。まあ生きていればまたひよ

つこり会えるでしょ。」

楓の頭をポンポンと叩き、（一種のクセのようだ）エリイが走り去っていった方とは逆の方へ歩いていく。

どれくらい走っただろうか。

先ほど別れた二人がもう見えなくなったところまで走り続けると、途端に歩くのを止め、息を弾ませながら歩き始める。

「って、言っただけは見たものの、どこにいこうかなあ……」
と、誰に聞いてもらうでもなく唯呟くエリイ。

ここはさきほどの飲食店がある商業のメインストリートから一本外れた裏通りとも言うべきところか。

先ほどのメインストリートの活気ある雰囲気とは違い、辺り一面を静寂が包み込んでいる。耳をすましても野良猫泣き声や、酔っ払いのおじさんが

寝息を立てて倒れていたり、一本道が違っただけでまるで別世界に來たような心境だ。

けれど本人はまるで辺りの様子など目に入らないようで、

「どうしようかな……。今日はどこで寝ようかな……。」
などと今日の寝床の心配をしている。

彼女に帰る家は無い。

いや、正確に言うと思いつけないのだ。

クリスには黙っていたが、実は数日前から幼い頃の記憶、自分が何者なのかさっぱり思いつけない。

ただ憶えているのは、『エルクレスティア「マクレガー」』という名前と、自分が聖職者なのである（自分の身なりが聖職者の格好だったというだけの

推測）ということだけだった。

記憶喪失といっても、普段の動作、反射的行動、精神力の使い方などはもちろんできる。字の読み書きもだ。思いつくといわれる抽象的な部分だけぼっかりと穴が開いたような、そういった類のものがまったく思いつけないのである。

気がついた時にはゲフェンと言われる街の外、外壁に横たわるように寝ていたのだ。

「もう橋の下はいやだなあ……。」

ゲフェンは、街と外界との間に大きく水路が街を囲うように引いてあり、さらに街の周囲を外壁が張り巡られている。

街の入り口には街と下界とを繋ぐ大きなつり橋が架かっており、何かあったときにはそのつり橋を畳むことにより外界からの攻撃に備えられる城砦都市なのだ。

普段はつり橋は畳んでいないため、その橋の下と水路の間が兆度雨風などをしのげる場所となる。

彼女はずっとその橋の下を寝床としていたのだ。

いくらしのげると言っても、やはり建物の中とは違い完璧に防げるわけではない為、夜など気温が下がっている頃には肌寒いし、少し風の音がするだけでビクツと体を震わせ、見えない恐怖に耐え忍んでいる。

一応水路はある為、人目が見つからない夜に髪などは洗うことはできるが……。

もちろんそんな生活である。ここ数日ろくな物も食べていなかった。そんな彼女がなぜあんな洞窟に行ったのかというと、自分が何者かわからない、お金もほとんど持っていない、お金を得る為には魔物を狩って、その魔物から得た、売るとお金になるもの（収集品と言われる）を集めなければならぬ。こんなどの誰か分からない人を雇ってくれる優しい人もいないだろう。

限界すれすれの精神を振り絞り思いついた彼女の苦肉の策だったのだ。

しかし大きな誤算が一つ。

いくら聖職者だろう、と思ってもどうやら退魔師のようなタイプではなかったらしいということだ。

おかげで今日は本当に死に掛けた。

もしあそこで助けがなかったら本当にそこで終わっていたかもしれない。

自分が何者なのかもわからないまま。

おそらく久しぶりであろうまともな食事を奢って貰ったことも本当

は涙が出るほど嬉しかった。
しかし

「何でクリスマスさんはあんなところにいたんだろ……。」「
などと疑問に思う。まあ考えたところでよくわからないが。

どこか寝れそうな所を探そうとするが、特に橋の下以外に一晩過ごせる所も思いつかなかったので、自然と足はそちらの方へと向かう。そこでふと気がつく。

「あれ？ここどこだろ……。？」

考えながら歩いていたら為か、自分の知ってる道とは違うところに行ってしまうらしい。

先ほどの裏路地をさらに奥に行った場所。

ちようど家と家の間にある狭い通路で、その奥はどうやら袋小路になっっている。

この辺りは電燈も無く、夜のせいもあってか暗くてよくわからない。

「やばい……。戻らなくちゃ……。」「

と呟いた時だった。

「よーねーちゃん！こんなところに一人でおいでは、家出か何かかい？」「

突然背後から男の声がした。

ビククリして後ろを振り向くと、暗くてわかりづらいが恐らく自分の身長の2倍近くあるんじゃないだろうかと思うくらい大柄の男がにやつきながら立っている。

お酒を飲んでいるのだろうか、その男の周囲からはアルコールのツンとした匂いがする。

「い、いえ！考え込んでいたら迷い込んでしまっ！す、すぐ出て行きます！ー！」「

こんなところでやばい……。！

瞬時で判断し、当たり障りの無い様に言い訳をしてやり過ごそうとすると

「まあそんな急がないでさ。俺達も兆度暇してたんだよ。ちよつと

遊んでいこうぜ？」

今度は路地の奥の方から声が聞こえる。

そちらを振り返ると今度は、細身で身長の高い男と、丸々と太った大男がこちらに歩みよってくる。

こちらの二人も酔っているらしく、嫌な匂いがする。

「そんなこといって、実はこういうのに興味があるんでしょ？見た感じ結構若そうだし。興味のあるお年頃なのかな？」

太った大男がゲラゲラ笑いながらエリイの腕を掴んだ。

「ちょよ、ちょよとやめてください！私はそんなものに興味はありません！」

掴まれた腕を必死で振りほどこうとするが、男の力は強くなかなか振りほどけない。

「そんなこと言わないでさ、おじさん達を楽しませてくれよ。聖職者は慈愛の精神なんですよ。迷えるおじさん達を救ってくれよ。」

大柄の男がそう言い、必死に腕を振りほどこうとする彼女に残り二人が迫ってくる。

「やめて下さい！離して下さい！大きな声だしますよ！」

必死に抵抗するエリイ。

「残念、こんな裏路地をうろつろつするほど間の抜けた奴はねーちゃんぐらいしかいねえよ。へっへっへ」

苦し紛れの脅しなどお見通しなのか、まったく動じない。

今日は厄日か何かなのだろうか。自分の間抜けさにため息がでる。

こう大男3人に囲まれては精神を集中させる暇もない。

「や、やめて下さい……。」

抵抗する体力も無くなり、すぐる様な声で呟く。

「おやおや、もう抵抗はおしまいかい？じゃあ遠慮なく救ってもらおうぜお前ら！」

卑劣な笑い声が聞こえる。

もう自分の運命を呪おう。

そう覚悟した時だった。

突如自分の腕を掴んでいた男の顔が真後ろにはじけ飛ぶ。

その反動で掴まれていた腕が振り解かれた。

「えっ!?!」

飛ばされた男の顔をよく見ると大きな石が顔にめりこんでいる。

よほどの衝撃だったのだろう、その一発で地面へ仰向けに大の字で倒れた。

一瞬の出来事で何が起きたのかわからないまま、その石が投げ込まれたであろう方向へ視線を向けると

そこに彼女はいた。

手元にはさつき投げたであろうサイズの石を右手でひよいひよいと上に放り投げ、それをまた掴んでいる。

さつきまでは知らなかったが、口には火のついたタバコを加えている。

「あんたはほんつとに危なっかしいんだから。心配で見たらんないわよ!」

この裏路地にすごく通った声が響き渡る。さつきまでずっと聞いていた力強くも優しい声だ。

「クリスさん!!」

うれしくなつてつい叫んでしまった。

まだ二人の大男が傍にいるのに。

「てめえこのアマ!!何しやがる!!」

長身の男が叫んだ。

「何って、こんな夜に道に迷って困ってる女の子も助けてあげられないような、哀れな子羊達に救いをあげただけだけど?」

え?何言ってるの?とでも言うかのような、あたり前のような口調で彼女は言った。

「調子に乗るんじゃないやねえ!ブッコロ・グガアアッ!」

長身の男が話終わる前に石が顔面へ飛んでくる。

一撃で意識を刈り取られその場へ倒れこむ。

助けてもらって何だけど、容赦ないな・・・とちよっと思ってしまうた。

「なかなかやるなねーちゃん。だが俺様はこうはいかないぜ!」

二人やられて闘争心に火がついたのか、エリイを突き飛ばし、先制攻撃とばかりにクリスに殴りかかるうと走りこんでくる。

あと1、2歩でコブシがぶつかろうかという距離まで差し掛かった時に

「あ、そこ危ないわよ?」

と、一言。

クリスがやった視線の先を見ると、彼女の二歩手前ぐらいにおびただしい量の油らしき物体が地面に撒き散らされている。

よく見るとその隅に油が入っていたであろう缶が転がっている。

・・・どこで手に入れたんですか・・・

「うおっ!!??」

クリスが注意した時にはもう遅く、大量の油で滑りやすくなっていた地面に男の足が盗られ、クリスの目の前で前のめりに盛大にこけた。

こけた勢いで顔面が地面にぶつかる瞬間。

男の後頭部にももの凄い衝撃がぶつかり、その勢いも重なって見事に顔面を地面にめり込ませた。

クリスがおもいつきり力カトを落としたのである。

それつきりピクリとも動かなくなる男。

うわぁ・・・あれは痛い・・・

思わず顔を伏せてしまったエリイ。

意識が飛んで伸びている男の頭を踏んづけながら

「あんたらも男なら女の子ぐらい助けてあげなさい! ったく、ろくな事考えないわねえ!・・・って聞こえてないか?」

一応聖職者なので正しき道を説いてるらしいが、きつと誰も聞こえ

てません。

男から視線を逸らし、エリイの方へ向き直ると、

「エリイ？大丈夫？」

顔を伏せていたのが泣いてるように見えたのか、優しい声が聞こえる。

ハッと気がつき目の前に見えるクリスを見ると

「ク、クリスさあ〜ん！！」

顔を見て安心したのか、それとも緊張の糸が切れたのか、泣き崩れながら抱きついてくるエリイ。

「あ〜はいはい、泣かない泣かない。もう大丈夫だから。」

エリイの頭を抱きしめながらポンポンと叩く。

「とりあえずこの場所から移動するわよ。目が覚めたらめんどうさ
いからね。」

そうエリイをなだめるといそいそと裏路地から掛けていった。

二人で走っている最中にクリスが一言

「あそこにタバコ投げてやればよかったかしら・・・。」

それはやり過ぎです。大火事です・・・。と思ったエリイであった。

しばらくしてゲフエンのメインストリートに帰ってきた二人。

ぜえはあぜえはあ言ってるエリイに対し、飄々としているクリス。

「よし、とりあえずここまで来れば大丈夫ね。」

と、上着からタバコのケースを取り出し、そこから一本取り出して
口に加え火をつける。

非常に慣れた手つきだ。

「はあはあ・・・く、クリスさん・・・タバコ吸うんですね？」

息を切らしながら聞いてみる。

「あら、これでもちゃんと成人よ。イメージじゃない？」

「何ていうか、以外というか。でも似合うかもしれないですね。」

素直な感想を言う。

「大体の奴はやめろー、だとかイメージと違う、とか言われちゃうんだけどね。」

煙を吐きながらつまらそうにクリスは言った。

「あ！でもちゃんとポイ捨てはしないわよ！ほら、携帯灰皿あるし！」

「いや、そこは察して重要じゃないんですけど……。」

あ、そこじゃない？とでも言いながら頭をポリポリかく。

「まあ、そんなことより。」

はいとこ本題に入りたかったのか、話の流れを遮るように、話し出す。

「なんであんなとこ行ってたのよー。ここらの人はみんな危険だから近づかないって有名なとこよー。」

若干項垂れながらエリイに聞く。

「い、いやしません……。ほんとボーツとしてたらあんなとこまで歩いてたらしくて……。」

「ほんと危なっかしいわねえ……。」

そう言いながらクリスはある事を思い返していた。

飲食店から出て、エリイと別れた時のことだ。

「待ってくださいくださいクリスさん！」

突如呼び止めたの楓。

「ん？お金ならちゃんとあとで払うって。」

「そのことじゃないです！！」

軽く冗談を返したつもりだったが、楓があまりにも思いつめた表情をしていたので何事かと思いを

「どしたの？あなたまでそんな顔して。」

彼女の方へキッチンと向き直り聞き返す。

「あの……エリイさんの事なんですけど……。」

何か言いづらそうだ。

「大丈夫だから言ってみて。彼女がどうしたの？」

少しでも言いやすくしてもらおうよう、なるべく穏やかな口調にする。
「実は……。ここ数日エリイさんを見かけたんですけど。エリイさん、おうちに帰ってないみたいなんです。」

「神妙な面持ちで話し出す楓。」

「帰ってないって、どういうこと？」

「はい、普通ならみなさん家路につくで在ろう夕方に、エリイさんは街の外の方へ歩いていくので。最初は別に何とも思わなかったんですけど……。」

毎日毎日同じ時間に街の外へ行くので。ある日気になってこつそり後をつけたんです。」

タバコの煙を吐きながら、楓の言うことを一字一句聞き取る。

「そうしたら、橋の下の方へ下っていった。こんなところで何をしてるんだろう？って覗いて見たら。そこで寝ていたんです。」

「寝てた！？え、それって？」

あまりにも以外すぎてつい叫んでしまった。その拍子で火のついたままのタバコを地面へ落とす。

「朝早くにもう一度確認したので間違いないです。エリイさんは橋の下を寢床にしているみたいです。」

あまりにも突然の事で頭の回転が追いついてこなかった。

家に帰らない？家出？でもそういう風には見えなかったし……。そもそもそう何日も橋の下で寝れる？

色々なことが一気に頭を駆け巡る。

「じゃーエリイは……。」

「はい……。恐らく……帰る家はないと思います。今日も恐らくは橋の下に……。」

楓の話聞き終わる前にクリスは駆け出していた。そう、さつきエリイが走っていった方角へ。

「ク、クリスさん！？どこへ！」

楓の声がもう遠くの方から聞こえる。

「決まってるじゃない！エリイのとこよー！」

走りながら答えを返す。

やっと頭が回ってきた。

いつもならまだ明るいつ方には橋の下に行ってるというが、今はもう辺りは真っ暗だ。

それに彼女はあまり世間やこの街のことを知っていそうに無い。

そんな状態でちゃんと戻れたとしても、こんなこと何回も繰り返していたら身が持たない。

で、今日の出来事だ。

変なことに巻き込まれていなきやいいけど……。

急いで街の外へ出て、まずは寢床にしていると言われていた橋の下を確認する。

……いない。

彼女と別れてから普通に歩いてここへ来ても、もう十分到着している時間だ。

「やっぱり迷ったか！」

そう言いながらまた街の中へと駆け出して行く。

メインストリートへ戻ってくると、なるべく彼女が行きそうな方角を探そうとする。

……分らない。

まだ会って数時間しか経っていないのに、彼女の思考などわかるわけがない。

軽く舌打ちをしながら

思いつかない以上、とにかくしらみつぶしに探すしかない。

そうやって走り出そうとした時

メインストリートより奥につづく裏路地のような道を見つけた。

「まさか……。」

その裏路地はこの街でも、ならず者、ゴロツキなどやっかいな連中が住みかになっている場所だ。

普通の人はまず寄り付かないだろう。
嫌な予感がする。

クリスはためらいもせず、その裏路地へと掛けていく。
いつもそうなのだが、良い予感はなく当たらないが、悪い予感は大
体当たる。

女の感ってやつだろうか。ぜんぜん嬉しくないが……。

しばらく走っていると、その道から200mぐらい先だろうか。建
物と建物の間にある袋小路のような場所に3人の男と1人の女の姿
が見える。

「やつぱり……!」

やはり当たってしまった。あの女性は見覚えがある。

エリイだ。

見つけた瞬間、走るスピードがさらに上がる。

その途中で道端に落ちていた手ごろな石二つと、路上に放置（恐ら
くはしまつてあつたもの？）されていたオイル缶を頂戴しておく。

間に合つて……!

たどり着いた時には、今にもエリイがやられてしまいそうな時だっ
た。

走った助走の勢いで思いつきエリイの腕を掴んでいる丸い男に石
を投げつけてやる。

クリーンヒット!

見事に男の顔を捕らえ、その場に倒れ伏させた。

間に合つた……!!

今思い返すと、よくもまああんな都合よく見つかったものだ、と少
しあきれ気味になる。

「クリスさん？クリスさん？」

ちよつと考えすぎているのだろう。エリイに名前を呼ばれてハツと
する。

「あ、ああごめんごめん。」

不思議そうに顔を覗かれ、慌てて意識を元に戻す。

「？大丈夫ですか？」

エリイが不安そうな顔をして尋ねる。

「だいじょうぶだいじょうぶ。ちよつと考え事してただけよ。」

と言つて笑つて見せた。

エリイの顔から不安さが取れ、普通の表情に戻る。

頭をもう一度整理する。

彼女には聞かなければならないことがある。

と、言つても立ち話も何なのでどつか手ごろに座れそうなどは無
いか辺りを見渡す。

そうすると、クリスマス達が歩いているメインストリートのすぐ傍に公
園がある。建物と建物間に作られた小さな公園だ。

遊具も何も無い、ただそこで生活する人たちが交流しやすい様にベ
ンチがいくつかが不規則に並べてあるだけ。

・・・まあ、あの辺でいいか。

「エリイ、ちよつとあつちで座つて話さない？」

そう言い、公園の方を指差して尋ねる。

「は、はい！大丈夫です！」

少し驚いた様子だったが、すぐに了解してくれた。

公園の中に入り、ちよつと奥へ行つたところに、調度二人並んで座
つても余裕なぐらいのベンチが設置してある。

そこにエリイはちよこんと、クリスマスは奥深くどかつと座りベンチの
背もたれに両手を掛ける。

少しの沈黙。

「それで、お話つて何でしょう？」

その沈黙に耐えれなくなつたのか不安そうにエリイが尋ねる。

「ああ、そうだったわね。」

ふと思ひ出したかのように話を切り出す。

「エリイ、あなた橋の下で寝てるの？」

いきなり直球を繰り出すクリス。あんままどろっこしいのは嫌いらしい。

「ええ！！！」

大きな声で驚いたのはエリイ。

「し、知ってたんですか!？」

何でバレたんだ!とでも言わんばかりの表情で聞き返してくる。

「あなた結構正直ねえ……。」

少しはごまかしたりするだろうかと思っただが、それでもなかった。少し落胆しつつ

「何でそんなところで寝てるのよ。家出してるって感じでも無さそうだし。何か帰れない事情でもあるの?」
少し探りをいれつつ尋ねる。

それを聞いたエリイは、さっきまでの驚いた表情から一遍、寂しそうな、それでいてちょっと残念そうな表情で

「事情つてわけでも無いんですけど……。」
重苦しそうに口を動かす。

「もし言いづらいことだったら言わなくてもいいのよ。まあここままで聞いておいてなんだけどね。」

別に彼女を助けたいとか、救いたいとかそういうわけではない。そこまでおせっかい焼きではないと自負している。(二回助けたのはたまたまだ、とか言いそう)

ただちよっとした興味本位で聞いてみただけなのだが。

「これを言っても信じてもらえるかどうかかわからないんですけど……。」

一度俯き、何かを決心したようにクリスの方を見据えて言った。

「私、自分の記憶が無いんです。」

一瞬、ほんの一瞬だが時間が止まったような気がした。

二人の間を冷たい風が通り抜ける。

その冷たさで思考が一気に駆け巡る。

興味本位で聞くには・・・ちよつと話が重たすぎた。

「記憶が・・・ない？」

何かしゃべらなくてはと思って発してはみたが、ただ事実を聞き返すだけだった。

それぐらい唐突だったのだ。

「はい・・・。自分の名前は覚えているんですけど・・・。自分が何者なのか、家はどこなのか、両親はいるのか・・・全く思い出せません。」「

寂しげな表情で話始めるエリィ。

「数日前にこの町の外壁近くで倒れてて・・・、自分の服装から、聖職者関係なんだろうってことはわかったんですけど。」「

よく見ると彼女の服はとところどころがボロボロだ。ずっと橋の下にいたせいか全体的に薄汚れている。
多分ずつと着っぱなしたっただろう。

「最初は何か思い出せないかと色々回ってみたんですが・・・。誰も話を聞いてくれなくて。」「

もしかしたら家出か何かと勘違いしたのかもしれない。会って突然記憶が無いんです、と言われてもそうは信じられないだろう。

事実クリスマスもそうだ。

もし会って初っ端「記憶が無いんです、助けてください。」「と言われても信じるに信じれない。

軽く流してしまう事だろう。

でも今は違う。

彼女の話すことのほとんどは、楓が教えてくれたことと一致しているし、何よりこんな身なりで、こんな寂しい表情で・・・嘘など付けるわけがない。

「はは、嘘みたいですよ。大丈夫です、慣れちゃいましたから。」「
クリスが黙って聞いていると、その寂しそうな表情をさらに曇らせ

ながら言う。

その声は少し涙声になっていた。

「心配しなくても大丈夫です！クリスマスさんには色々ご迷惑かけちゃいましたし。これ以上の迷惑は掛けられません！そろそろ暖かくなってきましたし！あそこ、以外と居心地いいんですよ？」

あきらかに空元気なのはわかっていた。彼女の心配させまいという心がそう言わせたのだろう。

「あっ、今日のご飯奢ってもらってありがとうございました！思い出せないですが、久々にああいう食事をした気がします！」

自分は大丈夫だ、だから心配しないでと元気をアピールする姿が、クリスマスにはとても寂しい表情に見えた。

そんなエリイを見て、一つ大きなため息を吐き、

「嘘をつくならもつと上手くやりなさいよ……。」
そう言った。

ああ……またか……。と言うような少し落胆した顔になるエリイに
「あなたの元気はぜんぜん元気に見えないって言うてんの！本当に元気ならこのベンチ担いで街内一周回って見せなさい！」
なんとも無茶苦茶な事を言う。

しかしその無茶苦茶さがどこか優しげな、暖かいような感じに思えた。

「え……。信じてくれるんですか……？」

おそるおそる聞いてくるエリイに言うてやる。

「どーこの世界にそんな今にも泣きつきそうな顔して嘘言う奴がいるのよ！そんなにポロポロで！それが演技だつて言うなら大した女優になれるわよ！」

確信を持っていえる。彼女の言うている事は本当だ。

別に何か根拠があるわけではないが。

そもそも、今にも崩れそうな彼女につばを吐くような行為はできない。おせっかい焼きではないがそこまで非情でもない。

「あなた見たいな危なっかしい子一人を橋の下になんて寝かせられ

ないわよ。」

「え……でも……。」

とても申し訳無さそうに、しかし少しの救いを得たかのような表情を見せると

「でももへつたくれも無いわよ！」

うれしい時はうれしいと言え！とでも言わんばかりの声でエリイを一喝。

「今日調度あたしもこっちに用事があつてね、宿を取つてあるんだけど。本当はもう一人いたんだけど急用でこれなくなつちやつてね。一つ宿の枠が余つてるのよ。このままにしとくのももつたいないからよかつたらこない？お風呂だつてしばらく入つてないんでしょ？」
「やっ」と救いの手が差し伸べられたのかと思ひ、我慢しきれなくなつて泣き出したエリイに

「そんな大した事じゃないわよ。たまたまよ、たまたま。ほら、もう夜も更けてきたから行くわよ。」

「ぜんぜん泣き止まないエリイに、夜空を見上げながら優しく促す。その照れ隠しが少しおかしかつたのか

「グスン・・は、はい。クリスマスさんは、素直じゃないですね？」

少し笑みをこぼしながらそう言つた。

「なにをー！」

「ちよー素直だつつの！あたし以上に素直な奴いないつつの！とかわけのわからない事を言いながら反撃するクリスマス。」

その行動もやつぱりおかしかつたのか突如お腹を抱えて笑い出すエリイ。

「もういい！先いつちやうからね！」

怒つて歩き出すクリスマスに置いて行かれまいと

「あー、ま、まっつてくださーい！！」

と、うれしそうに大声で叫びながらついていくエリイであつた。

第2節(前書き)

第2節ですよ！

第2節

第2節

「今日は月がよく見えるわね。」

ここはルーンミッドガッツ王国の首都プロンテラにある、王立聖術魔術中央研究院（通称：王立聖魔研）の一角にある研究室だ。

研究室と言っても人体模型やいかにもあやしい色の薬品とか、そういう陰湿な雰囲気ではなく、研究室の到る所に観葉植物や花の植木鉢など一見するととてもじゃないが研究室には見えない。どこかのちよつとデザイン的な喫茶店か何かではないかと思うほどである。

今は夜で灯りもほとんどついていないのでわからないが、この部屋の壁も白を基調としており、それが余計に研究室というイメージを離れさせている。

そんな研究室で一人、専用のデスクに大量の本（おそらく魔道書のようなもの）を山積みにし、椅子に腰掛けながら物思いに耽っている女性がいる。

彼女の名前はエルハイム・コージリフ・ヴァンフィールド。

ブラウン色のセミロングヘアで、両サイドの髪を肩から前に垂らし、それぞれを毛先の近くでアクセサリのような金具で結つてある。

若干垂れ目で、瞳は碧眼という特徴的な目をしている。メガネをかけている為、その部分は少しわかりづらくなっているが。服装はいかにも研究者らしい白を基調としたシャツにロングスカート。ただ一点違うのは上着として羽織っているのが、魔術師らしい装飾を施した薄茶色のローブを着ているところだろうか。彼女は王立聖魔研の総合研究部主任という肩書きを持っている。この研究室の責任者でもある。そう、この部屋の趣味も彼女によるものだ。

今の時刻は21時ぐらいだ。夜も一層色濃さを増し、月の明るさを

際立たせている。

今日もとても静かな夜だ。

こういう日は仕事もはかどる。

いつもは19時には仕事を切り上げ帰り支度をするのだが、こう月が明るいとまだ大丈夫、まだいける、とついつい遅くまでしてしまふのだ。

しかしさすがにこの時間は遅い。

この研究所から自宅まではそう遠くないが、夜道を歩くのはやっぱりちよつと怖い。

デスクに置いてある本はそのままにし、そろそろ帰り支度をしようかと思っていた時だ。

突如、電話が鳴った。

電話と言っても、機械の様な類ではない。この世界では、人間に生まれ持つている精神力を通信信号に変換し、専用の小型精神力変換通信端末（通称：電話、WIS、コンソールなど）

より不特定多数の相手と通信ができる。精神力は人によってさまざま、同じものは二つと存在しない。専用のコンソールに自分の精神力の波形を登録しておき、例えば友達の精神力の波形を登録しておく。そうすれば、いつでもボタン一つで相手の精神力の波形を探し出し、相手のコンソールに呼び出すことができる。

逆もしかりだ。

エルハイムは上着のポケットからコンソールを取り出し、それについている小型ディスプレイに表示されている名前を見る。

久しぶりに見た名前だ、とエルハイムは思った。

昔はよく遊びにいったり、魔物討伐で一緒に戦ったりもした。でも最近はお互い忙しくなって最近は疎遠状態にあった。

学生時代の頃がなつかしいな、と思ったところでまだコンソールが鳴っている事に気がつく。

あわててコンソールにある通話ボタンを押すと

『おっ！でたでた！ちよつとーエルハイムー！！出るの遅いよー！

！』

一際ばかりかい声がコンソールから聞こえる。

キーンとなった耳を少し押さえながら、コンソールに耳を当て、
「ちよつと声でかいわよ！そんなにしなくても聞こえるから！」
負けじと大声で言い返す。

『あーごめんごめん。ちよつと久しぶりで舞い上がっちゃってね。』

』

コンソールからガハハと笑い声が聞こえる。

さつきまでの静寂な空気をぶち壊すようだ。

「まったく、あなたもあいかわらずねクリス。」

ため息をつきながらそう答える。

『なーんか今日はため息つかれるな。そういう日なのかなー。』

聞こえていたらしく、うーんと唸り声が聞こえる。

「あなたの場合、今日「は」「じゃなくて、今日「も」でしょ！」

『さつすが親友！わかってる〜！』

「誰も褒めてないわよ！」

彼女と話すと大体こういう展開になる。意味があるんだか無いんだかわからないようなことをずーつとしゃべり続けるのだ。

でもここ最近は全く連絡を取っていなかった。別に声を聞かないと寂しくなるとか、そういう性格ではお互い無いので何も問題は無かったのだが。

それがめずらしく、しかもこんな時間に電話をよこすのは異例だ。

「それよりどうしたの？こんな時間に。」

何か訳があるんだろうと思い、話の流れを強引に戻す。

『あ、それなんだけどねー・・・』

・・・？

その後が一向に続かない。

「クリス？どうしたの？何かあったの？」

何か嫌な感じがしたため、あせっていたのか声が少し荒くなっていた。

『…………』

今だに向こうから何の返答もない。

……？いや、かすかだがクリスの様な声が聞こえる。

コンソールを耳に強くあてがいすましてみると……

『コラあ！エリイー！はしゃがないの！早くお風呂入っちゃいなさい！あー！服は脱衣所で脱ぐの！そっちはトイレだー！ー！』
なんと騒がしい声が聞こえてくる。

「お母さんかおのれは！！」

心配して損したのか全力でつつこんでしまった。

「用が無いなら切るわよ。」

しびれを切らしたのか、エルハイムが突っぱねようとする

『あー待ってー！ストゥップストゥップ！』

クリスが全力でコンソール越しから叫ぶ声が聞こえる。

「随分と騒がしいじゃないの、誰か他にいるの？」

さつきからエリイという単語が受話器越しに聞こえるので尋ねてみた。

『あゝいやちよつとそのこともあつて電話したんだけど。んんん』

何やら考えているのか唸り声が聞こえる。

「どうしたの、何か問題事？」

『いやゝそういつわけでもないんだけどねえゝ。あ！ねえねえ明日

ちよつと暇ある？』

クリスが突然そう尋ねた。

「暇っていうほどの時間は無いけど。今仕事の都合上研究室に籠りっぱなしだからね。」

『あゝ別に研究室でもいいのよ、ちよつと会わせたい子がいてねゝ
会わせたい子……？』

まあ大体予測できるが聞いてみる。

「もしかしてさつきから耳にする、エリイって子？」

『そーそー！さつきがエルハイム！話が早い！』

「いや、あなたがさんざ叫んでたのが聞こえただけよ。」

軽くうんざりした声で話す。

ただ、自分に会わせたいという理由が今一よくわからない。

「で、その子を何であたしに？」

『あーちよつと簡単には話せそうにないのよね。詳しくは明日直接話すわ。』

さつきまでのふざけたノリとは違い、深刻そうに話す。

「まあ、一応時間は空けておくわ。できれば午前中をお願いしたいのだけれど。」

『わかったわ。なるべく早くいけるようにするから、よろしくね！』
何とも簡単に言ってくれるものだ。こつちだつて色々スケジュールがあるのだが・・・

彼女があれだけ真面目になるのも何か理由があるのだろう。他でもない、彼女の頼みだ。親友として断る理由もない。

「じゃあ明日研究室で待つてるから。受付には話しておくから、時間遅れないでね。」

『おっけー！ありがとねー！』

そう言い、通話が切れる。

台風みたいだな・・・とエルハイムは思った。

嵐のように突然現れ、ひつちやかめつちや暴れた拳句、何事も無かつたかのように消えていく。

もう慣れてしまっている自分も自分だが。

きつと明日も厄介ごとを持つてくるに違い無い・・・。

軽くため息が出そうになるが、考えたつて仕方ない。全ては明日になつてみないとわからないのだ。

コンソールを上着にしまいながら

「せつかく綺麗な月夜なのになあ・・・。」

そう呟きつつ、少し憂鬱になりながら、研究室を出て家路に着くとにした。

一方その頃、ゲフェンにて

「よし、とりあえずこれで何とかなるでしょ。」

と、コンソールを上着に仕舞いながらクリスは呟いていた。

今彼女がいるのはメインストリート沿いに位置する、この街では割と大きな宿屋だ。

3階建てになっており、最大で5〜60人ぐらいは泊まれる規模だろうか。

その一角に宿泊している。

3階の角部屋はこの宿でも一番いい部屋らしいが、お世辞にもそんなとこ泊まれるお金があるとは言えない。

それでも一室にお風呂とトイレがちゃんと完備されている辺り、割といい宿屋なのだろう。

いまそのお風呂にはエリイが入っている。

宿屋に泊まるのが初めてらしく（まあ記憶が無いだけかもだけど）彼女のはしゃぎ様はすごかった。

「すごい！！でかいベットがある！うわ、こっちトイレ！？こっちはお風呂だー！！」

とりあえず片っ端からドアを開けて確認し、部屋中を飛び跳ねる姿は……。

（いや、まあ記憶が無いんじゃないやそら珍しいだろうけど……。）
どう見ても年相応の行動には見えない……。

と、言ってもエルハイムから見れば「あなたも同じようなもんよ。」
と言い放たれそうだが。

ちゃんとお風呂に入れてるか心配になって脱衣所の方へ行ってみる。
「エリイー。大丈夫？お風呂入れたー？」

などと聞きながら脱衣所のドアを開けると
「え！ああ！ちよつと待つてくださーい！今開けら……」

と、何やらドアの向こう側からエリイの声が聞こえるが、もう遅い。
エリイがしゃべり終わる前にドアが完全に開け放たれる。

「何よー。まだ入ってないのー?」

そう言ったクリスの目の前には、今まさに下着を脱ぎうとしているエリイの姿があった。

「あ……あ……」

半脱ぎ姿のエリイがこちらを見ながら硬直している。口もぱくぱく言ってる。

「何固まってるのよ。ほら、早く入る入る!」

クリスは別にそんなもの気にならないという様な、どうでもいいとでもいう様な感じで催促する。

「え、いやだつて……。裸が……」

「女同士じゃない。なーに恥ずかしがってるのよ。」

「は、恥ずかしくもなりますよ!だつて、は……は、裸なんですよ!」

「わかったわかった、出て行くから早く入っちゃってね!」

ぎゃーぎゃー騒ぎ出すので埒が明かれないと思ったのか、足早に脱衣所から出て行くクリス。

いちいち待つのもめんどくさいから一緒に入っちゃおうかな、とも思ったが多分あれじゃあ無理だ。

仕方が無いので寝室の方に戻り、ベッドの近くにある少しこじやれたテーブルセットの椅子に腰掛け、すぐ傍にある窓の外を眺める。

テーブルの上に置いてあったタバコの箱から一本取り出し火を付け、物思いに耽ってみる。

明日は朝早くに出て、カプラの転送サービスを使って首都に行かないとなあとか。記憶喪失つてどうやって治すのかなあとか。

普段はあまり物事を深く考えたりしないので、悩んだところで答えなどでてこない。

その為に親友に連絡したのだ。

彼女なら自分より知識がある。何かいい案があるかもしれない。

変に無い知恵を絞って彼女を連れまわすよりは確実なはずだ。エルハイムには申し訳ないが……。

エルハイムは学生時代の同級生だ。

その時に起きた出来事がきっかけで、彼女とはよく話す仲・・・そして戦友となった。

今回だけで無く、今までも何回お世話になったか。

そのたびに彼女は嫌な顔をする事も無く（腹では何考えてるかわからないが）話を聞いてくれている。

正直のところ、彼女無しでは今の自分は無かったかもしれない。

一つ大きくタバコの煙を吸い、ゆっくりと吐き出す。

だめだ、やっぱり考え事は苦手らしい。うまくまとまらない。

というより眠気が襲ってきた・・・。

吸いかけのタバコを灰皿に押し付け火を消し、椅子に腰掛けたまま首をだらつと傾け、うつむきながら少し眠ることにした。

どうせまだエリイはお風呂から出ないだろう。

今日はちよつと疲れた。

お昼前辺りだろうか、プロンテラからこのゲフェンへ転送サービスで送ってもらいそこから仕事のしっぱなしだ。

クリスが所属しているのはプロンテラ大聖堂の特殊工作班という所で、その中でも対悪魔・不死の魔物などに特化した部隊にいるのだが。

響きだけは格好いいが、いつも魔物と戦っているわけではない。事務処理などのデスクワークに、こういった地方都市へ赴き、異常が無いかなどを確認したりなどが主な仕事だ。今日もその例外では無く、いつもの地方都市巡回という任務で来ている。

地方都市にはプロンテラ大聖堂の支所があり、そこで働いている現地の聖職者と情報の交換などを行う。仕事事態は簡単なのだが、この移動が一番面倒臭い。

基本的にはカプラーサービスという各都市転送専門業者に依頼をして

現地まで送ってもらおう。ゲフェンの様な大聖堂の本拠地から離れた場所は出張費として転送代は支給してもらえないが、近い場所（例えば衛星都市イズルードなどがそれにあたる）は支給してもらえない。つまり実費か歩いて行け、ということだ。この転送代が実費となると、結構お財布事情に厳しいものがある。バカにならないくらい高いのだ。

聖職者の基本法力スキルで、ワープポータルという物が存在する。あらかじめ移動したい場所をメモリー（頭の中に描く感じ）しておき、ブルージエムストーンという石を使って、メモリーした場所まで転送することができるスキルだ。

昔は移動手段として個人でも使用できたらしいが。

現在では国の法により、特別な認可を得た者でない限り使用してはいけない決まりになっている。何でもブルージエムストーンが貴重な存在になったからだという。

いくらスキルを習得していてもそう簡単に使えないのだ。

無断で使用すれば、すぐに捕まる。国中に無許可ワープポータル検出レーダー（そのスキル独特の波長を感知するものらしい。）なるものが設置されているので

そうおいそれとは使えない。

もちろん自分もそのスキルは習得している。

が、こつ厳しくは使うに使えない。

なので、認可が下りている中に含まれるカプラーサービスを使用するのだ。

あまり得意でないデスクワークを何とか終え、少し生き抜きに街へぶらぶらと出かけていたら、おろおろとしている少女に出くわした。そう、楓だ。

いつもの彼女と感じが違うので声をかけたら、例の洞窟へ行ったかもしれない人がいると泣きついてきた。

見た感じ17〜8歳ぐらいの女性だと言う。

あせった。正直あせった。

あの場所は自分と楓、他には数名ぐらいしか存在を知らない。ある意味忘れられた所なのだ。

人が寄り付かないので、洞窟の中は多数の魔物がねぐらにしている。その中でも特に多いのが、元は人間であったであろう者、朽ちてもなお魂を現世に結び付けられ、身体を腐らせてまで生きようとする者、下級であるが悪魔族なども潜んでいる。

そんなところに一人だけで行ったらどうなるか。

熟練された戦士でも行こうとは思わない。

泣きじゃくる楓を落ち着かせて、洞窟のある方へと急いで駆けて行く。

たのむから間に合ってくれ。行ったところで、元は人間であつたろう物とご対面、なんてのはゴメンだ。

あせる気持ちを抑えどうにか洞窟に辿り着く。

普通の人ならこの洞窟から出てくる異様な、陰湿な雰囲気、外にも漏れんばかりの腐敗臭に気おされ、まず近づかないだろう。

それでも躊躇わずに入っていく。人一人の命がかかっているのだ。

楓の話から推測するに、まだ洞窟内に入ってそう時間は経っていないはずだ。

入り口付近でヘタっついてくれればよかったのだが。

辺りを探しても人がいる感じはしない。勇気があるのか、疎いだけなのか。

軽くため息を吐き、さらに奥へ駆けて行く。

走りながら思う。これ以上奥となると悪魔族なども潜んでいる。そっちへ行かれたらアウトだ。

悪魔は本能で動く魔物とは違い、ある程度知性を持っている。

下級、中級、上級と別れるのはその知性の違いだと思ってもいい。

ここに棲んでいるのは大抵が下級なのだが、それでも悪魔だ。

耐性の無い人間が襲われたら、一瞬にして魂を引つ張られてしまうだろう。

頭をよぎる不吉な予感を振り払い、辺りの物音に意識を集中させる。その時だ、少し奥の方でガラツと壁の岩が崩れる音が聞こえる。もしかや、と思い慎重にその物音の方へ近づいてみると。

今にもグールに喰われそうな女性がその場に座り込んでいた。

恐らく腰を抜かしたのか、死期を悟ってあきらめたのか。何やら一人でボソボソと呟いている。

でもまだ生きている。何とか間に合ったらしい。

音も無くグールの背後に近づき、精神力を込めた拳を叩きつける。

わざわざスキルなんて使う必要ない。

グールを倒し、その崩れ落ちる肉体から女性の顔が見えた。

その顔は何が起きたのかわからないような、呆然とした表情をしていた。

本当はそこで説教の一つでも言っただけだったが、やめた。

絶望の淵から希望を見出したような、そんな表情をされたら、さすがに照れる。

悟られない様に隠しながら、どうにか洞窟を抜ける。

これで何とかなった、と思っただけの出来事だ。

もしかしたら彼女は天然のトラブルメーカーなんじゃないか？と疑問に思ってくる。

何かこれでは済まない様気がしてきた。

って、既に半場巻き込まれている様な気がする。

「……さん？」

うわーやっぱそうだよこれ巻き込まれてるよ……

「……リスさん！」

いやでも自分から足突っ込んでるんじゃない……

「クリスさん!!!」

「うおわあ!!!」

突如名前を呼ばれ、ガタツと椅子から落ちそうになる。

「クリスさん大丈夫ですか！」

何やらずつとエリイに呼ばれていたらしい。全く気がつかなかった。「呼んでもぜんぜん返事しないから、死んじゃったのかと・・・」

「いや死ぬわけないでしょ・・・」
「がつくり頂垂れるクリス。」

「まあいいわ・・・で、どつたの？」

自分を呼ぶからには何か用事でもあるんだろう。

「あつ、そうだった。お風呂あきましたよー。」

突如思い出したように言うエリイ。

「あーはいはい、と・・・その前に。」

エリイをよく見ると、服装は下着の上にバスローブのような薄い上着を羽織っているが、髪の毛は濡れたままだ。

薄桃色の銀髪が濡れてより色濃くなっている。

「ほら、ちよつとこつちきて。そのままだと風邪ひくわよ。」

と言って鏡台の方へ連れて行く。

この部屋に備え付けの鏡台で、使い捨てのブラシや精神導力を利用した温風が出る機械ドライヤーなどが置いてある。

その鏡台の前に設置されている椅子にエリイを腰掛けさせ、その高さに調整されている椅子にエリイを腰掛けさせ、

「ほら、前向いて。」

鏡台の上にあるドライヤーのスイッチを入れ、エリイの髪を乾かす。最初は急に風が出ておっかなびっくりしたような表情で鏡と睨めっこしていたが、暖かい風が心地よくなってきたのか目がうつらうつらとしてくる。

「数日お風呂入ってなかった割にはあんたの髪の毛綺麗ねえ。」

エリイの髪を乾かしながらうつらやましそうに言う。

「ふえ？そうですか？」

今にも眠くなってしまうそうな時に声を掛けられた為、間の抜けた返事を返す。

「あたしの髪なんてボサボサのつんつんだし。こういうクセツ毛がうらやましいわよ。」

「そうですかあ？クリスさんの髪も黄色で綺麗ですよ。なんかかっこいいです。」

「女に向かっかってかっこいいって言われてもねえ……」

頂垂れながら今度はブラシで長い髪を梳かす。

「よし、こんなもんでしょ。」

髪の毛を梳かし終わり、頭をポンと叩く。

「あ、ありがとうございます。なんだかすごく懐かしい感じがしました。」

「懐かしい？」

「はい。なんだかお母さんってこういう感じなのかなって。」

「あたしはまだお母さんって年じゃないわよ……。」

そう思いながらふと疑問に思った。

「何か、思い出した？」

「いえ。特に思い出したわけではないんですけど……昔こういうことあったんじゃないかなって。」

少し俯きながらエリイが答える。

はあ、と一つ息を吐き

「大丈夫よ。きっと思い出せるわ。」

エリイの肩を叩きながらそう答える。

「とりあえず明日あたしの知り合いの所へ行きましょ。彼女なら何か方法知ってるかもしれないわ。」

俯いていたエリイがちょっとびっくりした様な顔をしながらクリスの顔の方を見上げる。

「明日も一緒にいてくれるんですか……!？」

「ここままでやっておきながら、はいさようなら、なんてできる訳ないでしょ。」

頭をポリポリ掻きながら、照れ隠しなのかエリイの視線を離しつつ言う。

「大丈夫、とりあえずあたしにまかせておきなさい。記憶が取り戻せるかは保障できないけど……。」

それを聞いたエリイは今度は嬉しそうにクリスに抱きつきながら「あ、ありがとうございます!!」

と、宿屋の外に響くぐらいの大きな声で叫んだ。

「わーった、わーったから、もう遅いから早く寝なさい。明日は早いわよ。」

はーい!と言いながらベットの方へ行くと

「ふっふっふ、このあとあたしのお風呂シーンでもあると思った? そんなもの無いわよ!! 残念ね!!!」

とか聞こえてくる。

「だ、誰にいつてるんですかクリスさん……。」

つつこまざるをえなかったエリイであった。

時同じ頃、ルーンミッドガッツ王国内の首都より少し外れた所にある施設にて……。

「……見つかっただか?」

男の声とする。

彼がいるのはその施設の一室で、部屋全体が薄暗くてよくわからない。ただその部屋には中心にとても大きい机と、そこに座る為の椅子が置いてあるだけだ。

例えるならば、どこかの企業の社長室のような、そんな豪勢な机だ。そこに座っている男性が一人。机越しにその男の部下と思われる人と話をしている。

「いいえ、今現在のところ発見までには至っておりません。」

部下が答える。20〜30台ぐらいの痩せ型で、目が少しやつれてる様に見える。この施設内の研究員らしいのか、Yシャツにネク

タイ、上着には白衣を羽織っている。

「・・・そうか。」

一方こちらの男性は見た目50台ぐらいでもとても恰幅が良い。何か格闘技でもしていたかのような姿だ。口元にヒゲを蓄え、口には葉巻らしき物を加えている。

「時間が迫ってきたな。もう後はないぞ?」

ヒゲの男が言う。その顔には少しあせりがでていているようにも見える。

「はい心得ております。目星はついておりますのでご安心を。」

ヒゲの男とは違い、悪魔で冷静沈着だ。

「明日そちらの方へ私の部下を投入させます。もう少々のお待ちを。」

「

「アレはとても大事なものだ。何かあつてからでは遅い・・・。」

ヒゲの男は口から重苦しい煙を吐き、背後の窓から外を見つめる。

月がとても輝いている。

「頼んだぞ・・・。」

「御意に。」

そう言い、部屋から出て行く白衣の男。

残された男が誰に言うでもなく一人呟く。

「造られし神・・・か・・・まるで御伽話だな・・・。」

明日の結果次第で自分の処遇も決まる。

自分よりもっと大きな存在、いや組織というべきか。

詳しい事は何も知らされていない。ただ一つわかるのは

逆らえば、殺される。

彼らが探しているのは一人の少女だと言う。

そんな少女一人の為に自分の命が左右されるのは癪だ。

明日は何が何でも結果を出さなければならぬ。

少女には悪いがこちらにも生きる為なのだ。

我ながら情けないものだ、と思いながらまた一つ大きく煙を吐き、夜空を見つめていた。

いてててて・・・

首を押さえながらプロンテラの大通りを歩くエリイ。

「どうしたの？首なんか押さえて。」

そんなエリイの姿を見て不思議そうに聞くクリス。

「い、いえ、ちよつと寝違えちゃって・・・。」

「間抜けねえ。」

そう言うクリスにエリイは深くため息をつく。

・・・あなたのせいですよ・・・

今日は朝から大変だった。

自分たちが宿泊していた部屋にはなぜかでかいベッドが一つあるだけだったので、昨日は二人で一緒のベッドに寝た。

それは別にかまわないのだが。

夢の中へ落ち気持ちよく寝息を立てている時に、突如身体が締め付けられる感覚に襲われ、

金縛りか何かと思って目が覚めたら、クリスに抱きつかれていた。

ちよつとびっくりしたが、彼女も気持ちよく寝ていたし、そんな悪い気はしなかったなのでそのままにしていたら。

どンドン締め付ける力が強くなり、サバ折りのような状態になる。

さすがに激痛だったので、なるべく起こさないよう最大限配慮しながらゆっくりと腕をほどく。

が、今度は足が飛んでくる。

そう、ものすごく寝相が悪いのだ。

足がようやく引っ込んだと思ったら今度は腕が飛んでくる。

きつとこのまま隣で寝ていたら死んでしまう。そう危機感を覚えたエリイは泣く泣くベットの下の行き、床の上で寝る事にした。

床が硬かったせいだろう、そのおかげで首を痛めたようだった。

それでもやつと睡魔に襲われ寝ていると

「だぁー！！寝過ぎたー！！！！」

とクリスの叫び声で目が覚める。
ギョっとして部屋にある時計に目をやると、すでに午前8時半を指している。

昨日チエックアウトの時間を言われたのはたしか9時だ。

「起きてエリイ！時間が無いわ！」

どたばたしながら身支度を始めるクリスに対し、ろくに寝れなかったエリイはまだ頭がうまく働かない。

時間が無いのは理解できるがどうにも動く気にならない。

「あ、あと五分だけ……。」

「んな時間無いわよ！ほら、とつとと歯磨く！」

今にも寝ようとしているエリイに歯ブラシをつっこむクリス。

「それ終わったらこれ着てね！」

と、綺麗に置かれた服を渡される。

昨日自分が着ていた服とはちよつと違う。色や形は聖職者の服だが、なんかこう、もつと動きやすそうになっている。

「あれ？これどうしたんですか？」

エリイが聞くと

「さすがにあんなボロボロになったの着せれないでしょ。とりあえずあたしが持つてきた服着るといいわ。あんたの服はあとでクリーニングかけとくから。」

と、荷物をカバンに詰めながらクリスが言う。

「あ、何から何までありがとうございます！」

「そんなのいいから、ちゃんと着れた？」

「はい！あ……でもちよつと胸の辺りがキツイかも……」
と言ったら

「ん？ごめん、よく聞こえなかったわ。もう一回言っつて？」

とものすこしい満面の笑みでクリスが答える。

その笑顔が逆に恐ろしいまでの殺気が込められている気がしたので

「な、なんでもないです！ピッタリです！」

慌てて訂正をする。

そんなこんなで結局チェックアウトしたのは8時59分。ギリギリだった。

ほっと一息ついたのも束の間、

「まだよ！プロンテラ行きの転送予約時間は9時15分！時間が無いわー！」

えぐぐつと項垂れるエリイを引つ張りながらカプラ転送サービスがある場所へと走っていく。

走っている途中に楓っぽい人にすれ違ったが、時間が無かったので軽くスルーをした。

遠くの方から「また人の話きないー！！」とか聞こえたが気にしないことにした。

何とか転送サービス地点まで走りきり、ぜえぜえ言いながら

「く、9時15分プロンテラ行きに予約したクリス！！リンベルです。。ま、間に合いましたか。」

と受付のカプラさんにもものすごい形相で言うクリスに気おされたのか「は、はい！リンベル様ですね！どうぞあちらへ！」

と、引きつった笑みで対応してくれた。

さすがカプラさん。あんな顔されても一応笑みは忘れないんだな、とエリイは思った。

転送装置が設置されている部屋へと通され、すごすごと入っていく。「？ここに入るとどうなるんですか？」

エリイがひそひそ声で尋ねる。

周りには他にもこの時間に予約した人々がいる。

さすがに今の時代、転送なんてものはごく一般的なもので、エリイの疑問はおかしい部類に入ってしまう。

「大丈夫よ。まあ見てなさい。」

クリスが軽く答えると

突如部屋全体が青白く光りだし、包み込んでいく。

「うわぁ〜綺麗だな〜。」

エリイが感嘆としているのも束の間

一瞬目の前が暗くなったと思ったら、すぐに目の前の景色が変わっていた。

「???あれ?」

頭にハテナマークが浮かび上がる。

「ほら、もう着いたわよ。」

「え?もう着いたんですか?」

クリスに背中を叩かれ、いそいそとその部屋を出て行く。

「うわあ~~~~!」

部屋を出てその景色に思わず声もれた。

さっきまでのゲフェンの雰囲気とも違うし、建物も違う。

この転送サービスは首都プロンテラのメインストリートに面しており、そこは道行く人、商売をする者などたくさんの人であふれている。

活気があるとはこういうことを言うのだろう。

この通りはとにかく露店を出す商人が多い。冒険者の為に剣や防具など装備品を売る店や、生活必需品などを安く売る店など、とにかくそこら中が露店だらけだ。

「ほら、ボサつとしてないで行くわよ。」

色んな露店に目移りしているエリイに声を掛けながら歩いていく。

「あ〜!待ってくださいーい!」

慌ててついていくエリイ。

「ところでどこに行くんですか?」

大通りを歩きながらクリスに尋ねると

「昨日言ったでしょ?あたしの知り合いの所よ。」

ほえ〜と頷き

「その知り合いさんはどこにいるんです?」

と質問をする。

「あそこよ、あそこ」

そう言っただけでクリスが指した先に物凄くばかどかい建物が聳え立って

いる。

「な、なんですかあれ!!」

エリイが驚くと

「王立聖術魔術中央研究院、略称王立聖魔研って呼ばれるところね。」

へえ〜って思ったが今一よく理解ができない。

「まあ平たく言えば精神力の研究なんかしてるところよ。あたしもよくわからないけどねえ。」

顔に出たのかクリスがそう付け加える。

「とにかく怪しいとこよ。」

「怪しくて悪かったわね。」

突如二人の背後から声がする。

「うわあああ!!」

二人が思わず驚いて身を引くと

そこに一人の女性が立っていた。

ブラウンのセミロングヘアと碧眼が特徴の物腰が柔らかそうな女性だ。

「な、なんだエルハイムじゃない。びっくりさせないでよおー。」

「あなたもつと真面目な説明しなさいよね。」

エルハイムが頂垂れる。

「で、そちらが例の子?」

と、エルハイムが尋ねると

「そうそう、エリイって言うの。よろしくね。」

肩をポンと叩かれ自己紹介をされる。

「あ、はい! エルステティア=マクレガーっていいいます! エリイはクリスさんにつけられました! よろしくお願いします!」

深く頭を垂れるエリイに

「あたしの名前はエルハイム=コージリフ=ヴァンフィールド。気軽にエルハイムって呼んでくれて結構ですよ。」

丁寧な敬語で返すエルハイム。

基本は敬語での話し言葉がクセのようだ。ただ、クリスのような親しい仲だと話し方も変わるらしい。

「とりあえず立ち話も何ですから、あたしの研究室へ行きましょう。」
「
そう言つてクリス達を手招く。」

「こつちよ。」

彼女達が歩いていったのはプロンテラのメインストリートより少し外れたところにある王立聖術魔術中央研究院という研究施設だ。

ルーンミッドガッツ王国の中でも一際大きい施設であり、国中のあらゆる法力、魔術、その他精神力に関わるもの全てを研究、開発している。

施設へは外門、正門、そして正面玄関と通らなければならない。各入口には常に警備員が配置され、部外者の侵入を常に警戒している。外門と正門の間は公園のような、庭のような芝が敷き詰められており、大きな木々がところどころに聳え立っている。自然面を考慮したとか。

正門から正面玄関は打つて変わって石畳で敷き詰められていて、とても人工的な感じがする。

それだけ広大な土地なのだ、外門から正面玄関に行くだけでも、大人歩く速度で10分少々かかる。

「つたく。本当ばかりかいわよね。人の税金こんなもんに使うんじゃないわよ。」

と、ぶつぶつ文句を垂れながら歩いているのはクリス。

「まあそういわないで。ここの研究だって結構人の役にたってるんだから。」

エルハイムが軽くなだめる。

「ほえ〜。ここつてどういいう研究してるんです?」

エリイが興味津々に尋ねる。

「そうねえ、色々ですよ。法力、魔力の研究はもちろん。精神力、

精神エネルギーとも言われていますね。そのエネルギーを応用した機械なんかも開発されてるのですよ。」

「キカイ？」

あまり理解していないのか、疑問をそのまま投げかける。

「そうですね。今日ここに来るためにカプラービスの転送装置使いましたよね？あれもこここの研究の成果の形なんですよ。」

「あなたが綺麗だなーって言ってたあれよ。」
クリスが付け加える。

「あー！あれもここが作ったんですか！」

思い出したようにエリイが言う。

「まあ実際作ったのはまた別の機関ですけどね。その理論を開発したのはウチなんですよ。」

得意げにエルハイムが言う。

「一昔前はね、ワーポータルっていうスキルを利用してただけど。そのスキルに必要な石が今は貴重なものになっちゃったのよ。それで困ったお偉いさんが開発したってわけ。」

クリスの発言にうんうんとうなずくエルハイム。

「ついでに言うと昨日使ったドライヤーもここのおかげよ。」

「はあ~~~~。」

感嘆とした表情で眩き目をキラキラさせながら

「よくわからないですけど、すごいところなんですネ！」

だめだった。がっくりを頂垂れるエルハイム。その肩をドンマイと叩くクリス。

そんなやりとりをしている間に正面玄関へとたどり着く。

途中の警備員さんはエルハイムがいるおかげですんなりと通れた。

玄関を入ったところでまたエリイが驚く。

「うわー！でっかいロビー！」

そこは何か演劇でもできそうなぐらいのホールのような高い天井、辺りを全て綺麗な石でしきつめた壁が構えた豪勢な作りになっている。

そのロビーの真ん中にはどこかの有名な彫刻家を作ったのだと思われるオブジェがどかと居座っている。

「何の意味あんのこれ。」

そのオブジェにつっこむクリス。

「そういうのに美を感じる物なのよ、お金のある人はね。ちょっとまってて、受付に話して来るから。」

そう言つて、ロビーの奥にあるこれまた馬鹿でかいカウンターにいる受付嬢らしき人に話していくエルハイム。

「ほえ〜〜。」

さつきから驚きっぱなしのエリイに

「そんなにめずらしい？こんな税金の無駄遣いに。」

辺りの職員に聞こえるか聞こえないくらいかの大きさをクリスが尋ねる。

遠くにいた職員が心なしかこつちを見ている気がする。

「いえー。私今までこんなとこ見たこと無かつたもので。あ、もしかしたら見たことはあつたかもしれないですけど・・・。」

少し俯きがちになりながら答える。

そうだった、記憶がないんだつた。と思いながら

「あたしも最初はびっくりしたもんだけど。何かこう税金とられ始めてからねえ、こういうもん見ると何かムカムカしてくるのよね。」

どうみてもそのオブジェを見ながら言っている。

「いっそぶつ壊してやろうかしら。」

拳を握り締めながら言うクリスにあははと愛想笑いを浮かべるエリイ。

「お願いだからそれに傷つけないでね。ウチの所長の趣味なんだか

ら。」

受付から戻ってきたエルハイムが釘を刺す。

「チツ。気づいたか。」

そうクリスがぼそつと呟く。

舌打ちが聞こえたきがしたんですが、本当に壊そうとしたんですか

クリスさん……。と思うエリイであった。

エルハイムに連れられてロビーの奥にある研究施設の内部へと進んでいく。

途中あちこちで白衣を着た職員と思わしき人を多数見たり、何やらあやしい研究をしている場所を横切ったりと、まあまず見てる分には飽きない所だ。

興味に誘われてエリイがどっか行ってしまわないように、注意深く見守るクリス。

別に研究を邪魔するのは大いにやれなどと思うが、迷子になられたらやっかいだ。

そんなこんなで研究施設の端から端まで歩いたろうか、その先にエルハイムの研究室があった。

ドアの扉のところに「総合研究部 主任室」と書かれている。

「ここはあたし専用の研究室なの。他の人はいないから安心して大丈夫ですよ。」

これから話すことに配慮してくれたのだろうか、エルハイムがそう言いつつドアを開ける。

遠慮がちに入っていくと、想像していた雰囲気とは一変、室内を白を貴重とした壁に、いたるところに観葉植物や花などが飾ってある。今は昼間なので、窓から挿す光が余計にその明るさを強調させている。

研究室というよりはお洒落な喫茶店のような感じさえる。

「まあその辺に座ってください。」

と、研究室の真ん中にあるテーブルと、それを四方から囲む椅子の一角に座るクリスとエリイ。

「紅茶でいいかな？」

エルハイムにそう聞かれ、「は、はい！」と妙に緊張した面持ちで答えるエリイ。

「えーコーヒーないのー？」と言うクリスには「あなたに聞いてな

いわよ。」と一喝している。

部屋の隅に備え付けの給湯所？らしき所でお湯をわかし、お洒落なティーカップに紅茶を入れ、こちらにもってくる。

「まあそんなに緊張しなくて大丈夫よ。」

紅茶をテーブルに置きながらエリイに優しく声をかける。

この子に触れていると気持ちが穏やかになるのは、才能なのかなとふと思うクリス。

紅茶を配り終わると椅子に腰掛け

「さて。お話って何かしら。」

と、今度は真剣な顔になつて話しだすエルハイム。

「あ、そうだったわね。」

すっかり落ち着いてしまっていたクリスが思い出したように言う。

「まあ、昨日も話した通りこの子のことなんだけど。」

エリイの頭をポンポン叩きながら話し出す。

「その子がどうしたの？」

紅茶をすすりながらエルハイムが聞く。

「この子、自分の記憶が無いみたいなのよ。」

さらっとクリスが言った。

「ぶっ！」

いきなりの一言に飲んでいた紅茶を思わず噴出す。

「き、記憶が無いですって!?!」

噴出した口元をポケットに閉まっていたハンカチでふき取りながら聞く。

「だからそう言ってるじゃない。」

あきれた様にクリスが答える。

「あ、あなたもつと言いつてもんがあるでしょ！いきなり過ぎるわよー！」

いきなり怒るエルハイムに気おされながら

「まあまあ。で、あたしもそういうのよくわからなくてね。エルハイムに相談にきたのよ。」

そう言いながら軽い経緯を話すクリス。

しばらく黙って聞いていると

「はあ、まああなたらしいって言えばあなたらしいけどね。」
軽くため息をついてそう呟く。

「取り合えず大体話はわかったわ。」

そう言い、

「わかったけど、一つ重要な事があるわ。」

とても神秘的な面持ちで言うエルハイムに、エリイとクリスは息を呑んで聞く。

「ごめん、よくわからにゃい。」

盛大に椅子からズリ落ちる二人。

「ちょ、ちょっと！わからないってどーいうことよ！」
身体を起こしながら思わずクリスが叫ぶ。

「どう考えたって専門外でしょ！それくらいわかりなさいよ！」

逆ギレしたかのように叫ぶエルハイムにまたも気おされ

「だ、だって何か知ってるかな？って思ったんだもん。」
ぶつぶつ呟くクリス。

「はあ。まあしょうがないわね・・・。」

半場あきらめたように言いながらエリイの方へ向き直り

「とりあえずあたしは専門外だけど。ちょっといくつか質問してもいいかな？」

と切り出す。

「は、はい！」

それまで緊張し過ぎて何も聞いていなかったのだから。いきなり話を振られておっかなびっくりと返事を返す。

「まず一つ目。どこか頭に衝撃あったとかある？」

「ベタねー。」

クリスのつつこみに「つつさい、黙れ！」とでも言わんばかりの表情で睨む。

「うーん、特にそういうのは無いみたいです。頭も痛いところないで

すし。」

自分の頭をさすりながら答える。

「外部からの衝撃で、ってわけでもなさそうねえ。」

うーんと唸りながらしばらく考え

「となると精神的なモノかなあ。何か思い出せることある？」

ふるふると首を横に振るエリイ。

「うーん、やっぱり難しいわね。もしかしたら何か作為的なモノの可能性もあるし……。どっちにしろここじゃ検査もできないしね。」

「そう言つと

「あたしよりセロ先生の所にいった方がいいかもしれないわ。」

「セロ先生？」

エリイが尋ねる。

「えー！セロのとこいくのが嫌だからあなたのとこきたんじゃない！」

クリスが面倒くさそうに叫ぶ。

「そ、そんなに变なんですか？」

あまりにも行きたくないような感じに見えたのでおどおどしながら聞くエリイ。

「あーいや、セロ自体は別に問題ないんだけどね……。」

「いる場所が問題なのよ……。」
ため息まじりに答える。

「ルーンミッドガッツ王国のお隣さんの国でね、シュバルツバルト共和国っていうんだけど。そこのジュノーって場所にいるのよ。」

「それが何かまずいんです？」

エリイが尋ねる。

「昔は簡単に行けたんだけどねえ。今はお互いの国の緊張状態が増したせいで、行きづらくなっちゃったのよ。」

「ああ、それなら問題ないわ。」

エルハイムが口を挟む。

「なんでよ？」

クリスが聞くと

「今ね、セロ先生プロンテラにいるのよ。何でも医療研究の一環でウチに来てるんだとか。しばらくいるって言ってたから、多分まだいるはずよ。」

ここでいうウチとは聖魔研のことだ。

「え！ココにいるの！？」

クリスが椅子から突然立ちあがり、驚き混じりに聞く。

「何てご都合主義……。ラッキーよエリイ！セロなら医者だから何かわかるかもしれないわ！」

ちよつと興奮気味に話すクリスに

「はいはいちよつと落ち着いて。空いてるかどうか確認とってみるから。」

と言いつつ、窓際に位置する自分の作業用デスクに向かうと、その上に設置してある通信端末をとる。

この通信端末もコンソールとほぼ同じ原理だ。

「……。もしもし、エルハイムです。おはようございます。」

恐らく相手はセロだろう。軽い経緯などを話している。

「クリスさんクリスさん。」

エリイが袖を引つ張って呼ぶ。

「ん？どしたの？」

「セロさんって怖い人なんですか？大丈夫でしょうか……。」

どうやら医者って響きで恐怖を感じているようだ。医者「注射される、のような子供みたいな発想だ。」

「大丈夫、別に痛いことなんてしないわよ。それにセロは面倒見がいいからねえ。」

あははと笑いながらエリイの不安を払拭させる。

「まあ痛いことはしないけどねえ。うん、痛いことはしないけど……。」

だんだんと俯きがちになっていくクリスに

「な、なんですか！何されるんですか！」

違う不安を感じるエリイだった。

「連絡とれたわよ。今ちょっと手が離せないから午後に来てほしい
そうよ。」

電話をしていたエルハイムが戻ってくる。

「おっけー。ありがとーエルハイム。」

「さて、あたしは仕事に戻るけど。あなたたちどうするの？まだ時間あるでしょ。」

んーそうねえ、とアゴに手を当てながら考えるクリス。

そして思い出したように

「そうだ！まだ荷物も持ったままだし、一旦あたしの家に行きますか！」

そう提案するクリス。

「クリスさんちですか！」

ちよつと嬉しそうに話すエリイだったが

「それで、おうちどこにあるんです？」

近くにあるんだろうか、と思いつながら聞いてみる。

「そうねえ、こつから2〜30分くらい歩いたところかなー。」

帰る前に紅茶全部飲んどこうと、残った紅茶を一気飲みしながら答える。

「まあそこは借りの住まいでね。本当の家はフェイヨンってところにあるんだけど。」

「借りの住まい？」

「そそ。あたしも一応プロンテラ大聖堂って所で働く身だからね。

フェイヨンから通ったんじゃないお金が掛かり過ぎてしょうがないのよ。」

「そのフェイヨンって場所はここから遠いんですねー。」
感嘆としながら聞くエリイ。

記憶を無くしてる彼女にとっては何もかもがほとんど初めての事な
んだろう。

「自然が多くて良い所よー。今度連れて行ってあげるわ。」
「本当ですか！」

飛び跳ねて喜ぶエリイをはいはい、となだめながら

「じゃーあたし達は一回出るわね。」

そう言つて去つていこうとするクリスに

「ちよつと待つて！セロ先生の場所わかるの？」

それを制止するエルハイム。

「あーそうだった。どうすればいいんだっけ？」

すっかり忘れていたクリスにため息をつきながら

「本人の話聞かないわね……。とりあえず受付に話しておくから。そこで聞けば案内してくれるはずよ。」

「了解しました、エルハイム軍曹！」

と、敬礼しながら答えるクリス。

「軍曹つて何よ……。。」

さらにため息をつく。

「じゃーとりあえず行くからあとよろしくねー。」

「あ、クリス！あともう一個！」

出て行こうとするクリスをまた制止する。

「なによ〜。」

まだなんかあるのー？とでも言いたげな表情で反応するクリスに

「今日の夜時間ある？」

唐突にそう聞かれ

「え？何？デートのお誘い？」

「違うわよ！！話があるの！」

顔を真っ赤にして怒るエルハイム。

「冗談よ冗談。んー、多分大丈夫だと思う。」

「一応いつものところで待つてるわね。何かあったら連絡ちよーだ

い。」

はいはい〜と言いながら出て行くクリス達。

そこでふと思う。

「なによ〜。」

こう言つては何だが、また厄介ごとに巻き込まれている気がする。いや、あれは彼女の性格からか。

昔からののだ。困っている人を放っておけない。一種の使命感すら感じる時があるくらいだ。

別に人助けが悪いとは言わないが、それで彼女自身が危険な目にあつた事も何度もある。

まあ、そういう時の為に自分がいるのだが。

彼女が前に出て引張るといふのなら、自分はそれのバックアップだ。

昔に起きた事件以来、自分はそうしよう、彼女の味方でいようと決めたのだ。

だが、今回はそう簡単にはいかないかもしれない。何しろ記憶喪失だ。今日明日で終わるわけがない。

記憶が戻るまで面倒を見るつもりなんだろうか。

まあそれを聞いたところで、あたり前でしょうが！何て答えしか返つてこなそうだが。

らしいといえばそれまでか。

はあ、とため息をつきそれ以上考えるのをやめる。たとえ何が起ころうと自分のやることは変わらない。

彼女の助けになるならそれでいい。

「記憶喪失ねえ。まったく・・・。」

そう呟きながら仕事に取り掛かるエルハイムだった。

「そんな装備で大丈夫か？」「大丈夫だ、問題無い」

「クリスさん時事ネタはやめてください。」

研究室から出たあと、迷子になりつつなんとか聖魔研を出た。

途中クリスが思いつきり壁を壊そうとしてたのを必死でエリイが止めていた。

その後街の中心部を抜け、郊外に広がる居住地区のような所に出た。

「こつちよ。」

クリスがそう言っただけで先頭を歩き案内をする。

「言っどくけど何もねいからね。寝に帰るだけの部屋だからねー。」
そう言っていたが、エリイはわくわく感が止まらなかった。

子供の頃に初めて他人の家に遊びに行く、というのを思い出すといいかもしれない。自分の世界とは違う他人の世界が見えるかのよう
な、そんなわくわく感がエリイにもあったのだ。

住宅地が所狭しと並んでいる道を抜けると、その一角にその家はあった。

家というよりは集合住宅地とも言つべきか。3階建ての大きな建物で、ワンフロアを2箇所に分けた造りになっておりその住宅地は合計で6世帯住めるようになっている。

クリスの住みかは3階のようだ。

建物の真ん中に大きい入口があり、部屋を区切るように3階までと続く階段を登る。

その先にある扉の横に小さくネームプレートがあり「Chris Remember (クリスリンベル)」と書いてある。リメンバ
ー？

「当て字よ、当て字。」

そっけなくクリスは答えた。

「ほら、そんなことより入っちゃって。」
ハテナマークがますます浮かぶエリイを催促し中へと入っていく。

先に感想を言ってしまうえば本当に何も無い部屋だ。

寝る為のベッドと食事を取るための最低限の調理器具、食器などが置いてあるだけ。

この部屋には生活感というものが抜け落ちている気がする。

「だから言ったでしょー。何も無いって。」

そんなエリイの顔を見てか、クリスが言う。

「これで生活できるんです?」

疑問に思っで尋ねると

「もちろんここは寝に帰るだけの部屋よ。こつちでの仕事が多い時とかね、使うの。フエイヨンの方はもつと色んなものあるわよー。」

「おうちが二つあるんです?」

さらに聞く。

「あーこつちはねー、大聖堂からの借家だからほとんどタダみたいなもんよ?まあ脅したんだけどねえ。」

最後の方にさらつと怖い事を聞いた気がしたが流すことにした。

「まあとりあえず本当何も無いところだけどくつろいで頂戴な。」

そう言いながら上着からタバコを取り出し火をつける。

「ふーやつと吸えるわあ。さすがにエルハイムの所で吸ったら殺されるわね。」

「あれだけ綺麗なお部屋ですもんね。」

ベッドに腰掛けながらエリイが話す。

少し不安な顔をしているようだ。

「大丈夫よ。セロならあなたの事も何か見つけてくれるわ。」

「そのセロさんて方はどういう人なんでしょう。」

やはり不安げに話すエリイ。

「んーそうねえ。一言でいうのはちょっと難しいけど……。」

クリスが遠い目をしながら答える。

「ま、あえばわかるわよ！大丈夫、いい人だから！」

まるで何かを隠すように話を終わらせようとするクリス。

「不安ですう……。」

「そ、それよりお腹空かない？朝からドタバタしっぱなしで何も食べてないでしょ。」

これ以上この話題はダメ！とばかりに急に話を逸らす。

「あー、そういえば空きました……。」

急にお腹のあたりを押さえて答える。それを強調するかのようによくう〜とお腹が鳴った。

「よし！まだ時間もあるし、お昼でも食べにいきますか！」

タバコを吸い終えたクリスが席を立とうとした時

「あ、そういえば。」

エリイが思い出したように

「本当今更なんですけど……。クリスさんお仕事大丈夫なんですか？私なんかにつき合ってしまった。」

と言うと、あきれたように

「ほんと今更ね〜。だいじょーぶよ。昨日あつちでの仕事は終わらせたからね。あとで適当に報告しとけばとりあえずそれで終了。意外と自由なのよ？」

ふふん、と得意げに話すクリス。

それに対し

「自由っていうか安易ですね。」

素直な感想を言うエリイであった。

「そんな安易で大丈夫か？」「大丈夫だ 問題ない」
「クリスさんだから時事ネタやめてください。わかる人しかわかりません。」

時刻はまだ11時半ぐらいだったが、朝飯を抜きで行動していた為、お腹の空き具合も兆度いいとのことだ。

早めの食事をとる為にまた市街へと出かけていくクリス達。
どこで食べようか悩みながらメインストリートを歩いていると一人の男性に声をかけられた。

「お！クリスじゃねーか！なんだ仕事は終わったのか！」
突然後ろから話し掛けられたのでビクツとしながらなぜかエリイが振り向くと身長の高い男性が手を振っていた。

赤みの入ったブラウンのショートヘア、兆度耳に髪の毛がかかるくらいだろうか。綺麗な色なのにちよつとボサボサ気味だ。

意外と細身だが、半そでから見える腕などは意外と筋肉質だ。

そして何より、服装が派手だ。。

例えるならアロハシャツみたいな感じなのだろうか。下のズボンは青みがかったジーンズのような感じなのだが。

「うわ、派手っ！」

ついエリイが口走ってしまったほどだ。

「ん？ああ、ハルトじゃない。どしたの、こんなところで？」

これだけ派手なのにそんなの当たり前かのようにクリスが言う。

「商売だよ商売！オレが何だか忘れちゃったのか！」

「え、漫才師じゃなかったっけ？」

大真面目に答えるクリスに

あー神様、なんてこの人は愚かなんでしょうか。とでも言いたげに額に頭を当て嘆くハルトと呼ばれた男性。

「あ、あのークリスさん。」

横で聞いていたエリイが指をツンツンつつきながら

「この方はお知り合いなんです？」

申し訳なさそうに聞く。

「知らん。」

一言バサツと切り返すクリスに

「うおーい！！今さっきオレの名前呼んでたよね！？あきらかに知り合い風に話してたよね！？」

今度は何でやねん！とでも言いそうなくらいの勢いでつつこんでくる。

「やっぱり漫才師じゃん。」

そう言うのと今度こそ本当に、街中に聞こえるくらいの声で何でやねん！とつつこんでいた。

「ま、まあいい。とりあえずそこのお隣の彼女に紹介をしてくれ。」

ぜえはあ言いながら話を進める。

「しょうがないわねえ。」

とても面倒くさそうに言いながら

「彼はハルト。職業漫才師。」

「もういいつちゅーねん！！！」

と欠かさずにツツコミを返し

「もういい。自分でする・・・。」

あきらめたのか項垂れつつ紹介をし始める。

「オレの名前はロックハルト。ガールランド。大体みんなはハルトと呼んでるかな。普段はここで露店やってたりするんだよ。」

「というとかエデさんみたいな商人さんなんです？」

エリイが疑問に思っただけで尋ねる。

「職業は商人だけだね。一応これでも冒険者ギルドのマスターなんだぜ!？」

得意げに鼻を鳴らしながら言う。

「へえー。」

横で聞いていたクリスが以外とばかりに相槌を打つと

「お前もそのギルドマスターだろうが!！」

渾身のツツコミがすかさず入る。

「え？クリスさんもギルドマスターさんなんですか？」

エリイが尋ねると、あーあーばれちゃったと言わんばかりに

「まあ正確には副マスターなんだけどねえ。一応あたしも冒険者ギルドに所属してるのよ。」

と説明をする。

「へえ〜。そうなんですか〜。」

感嘆としているように見えるが、きつと冒険者ギルドの意味をわかってないなとクリスは思った。

「で、その子はどうしたんだ？」

ハルトが今度は質問をしてくる。

「ああ、この子は・・・」

とクリスが説明をしようとした時に

「ま、まさか・・・。やめとけ!それだけはやめとけ!仮にも聖職者なんだから!すぐに親御さんに・・・」

「誘拐じゃないわよ!!!」

ハルトが言い終わる前にクリスのするどいツツコミが入る。

「えーだってすごい裕福そうな、クリスとは正反対な清楚な子を・・・」

なんかよく知らないがすごく嘆いてるように言う。

「粗雑で悪かったわね!」

そう言うクリスとハルトのやり取りが漫才見たいだなあと思いがから聞いていたエリイだった。

「で、その子は？」

若干置いてけぼりをくらっているエリイを気にするように話を戻すハルトに

「ログ参照」

と、一言そっけなく言うクリス。

「そういうのやめて！お兄さん難しい言葉わかんない！！」
今にも泣きそうだ。

「私はエクレスティアです！クリスさんはエリイと呼んでくれます！」

もう埒が明かなくなつてきそうなのでエリイが強引に入ってきた。

「エリイちゃんか！ヨロシクな！」

救いの神が現れたと言わんばかりに上機嫌になって、満面の笑みで握手を求めるハルトに

「ふ、不束者ですが、よ、よろしくお願いします！」

差し伸べられた手を両手で掴みながら深々とお辞儀をするエリイ。

「そんな今から嫁ぎに行くんじゃないんだから……。」

あまりにもおかしかったので言わざるを得ないクリスだった。

「で、そのエリイちゃんとクリスが何でこんなところにいるわけ？」

疑問に思ったハルトが尋ねる。

いい加減もう説明するのが面倒だったので

「あーじつはね、かくかくしかじかで……。」

「お前説明する気ないだろ。」

もはやツツコむ気力も無いようだった。

ハルトがどうしても気になるといので、近くにあった軽食屋で昼御飯を取りつつ、説明をする。

もちろんハルトのオゴリだ。

「えー！！」

クリスの心の声が聞こえていたらしい。

「いや思いつきり口でいつてるじゃん！！」

「当たり前でしょーよ。貴重な時間をこうやって割いてあげてるんだから。」
「そう言いながらクリスが食べているのはサンドイッチとコーヒーのセットのようだ。」

「ひでえよ。扱いがひでえよ……。マスターなのに……。」
「また泣き出しそうに、テーブルに顔を突っ伏してしゃべっているハルト。」

彼の前にはこれでもかというほどにでかいハンバーガーがある。

「まあまあ落ち着いてください。私もお金もつてませんが……。」
「フォローしてるのかトドメを刺してるのかわからない発言をしているエリイはパンケーキのようなモノを注文したらしい。
甘くいい匂いが漂っている。」

「エリイちゃんに免じてここは許すが、おめーだけだったらせつてー
ーおごんねーかなー!!」

ハルトの最後の抵抗も空しく、はいはいごちそーさんと手をひらひらさせながら涼しそうな顔でサンドイッチを食べるクリス。

「で、エリイちゃん記憶ないの?」

何を言っても無駄とわかったのか、ため息をつきつつハルトが聞く。
「はい、自分の名前以外思い出せなくて。」

注文したパンケーキをフォークでプスプスと刺しながら俯きがちに答えるエリイ。

「だーいじょーぶだつて！絶対思い出せるさ!」

「どっからその根拠がでてくんのよ。」

ハルトの受け答えにクリスの鋭いツツコミが入る。

「だってセロんとこいくんだろー?性格はあれだけど、頭いいもん
な。」

ハンバーガーにかぶりつきながらしゃべる。

「ハルトさんまで……。セ、セロさんて人はそんなに怖いんです
・?」

エリイが少し怯えながら聞く。

それを見たハルトは少し困り顔になりながら

「いやー、怖いってわけじゃないのよ。いや・・・ある意味怖いか・・・」

何かを思い出したのか急に背筋が凍る感覚になる。

「まあ、ハルトは特にねえ。注意した方がいいわよ。」

「そんなにこやかな顔で怖いこと言わないでくれますか!」

そんなやり取りをしている内に頃合な時間になる。

「まあエリイは大丈夫よ!とりあえず行って見ますか!」

あきらかに怯えているエリイを元氣付けるようにしゃべりながら席を立つクリス。

「ん、なんだもう行くのか。」

ハンバーガーを食べ終えたハルトが最後にこう言った。

「エリイちゃん!もし思い出せなくて行く場所なかったらフェイヨンに来な!ウチはいつでも歓迎だからよ!」

そのさわやかな笑顔に勇氣付けられるように

「は、はい!ありがとうございます!」

そう言っつてまた深々と頭を下げるエリイだった。

「エリイはあげないわよ。」

「そっついう意味じゃねーよ!」

ハルトと別れ、また聖魔研へと足を運ぶ。

途中ビクビクと震えるエリイを宥めながら、受付に話をしてセロのいる場所へと案内してもらおう。

あいかわらず途中で道の道は迷路だ。迷子になる自信がありすぎて困る。5分ぐらい歩いただろうか。やっとセロがいる研究室のドアの前へとやってくる。

「あ、あの大丈夫でしょうか・・・」

いまだにビクビクいつてるエリイ。

「だーいじょうぶよ！痛くするようだったらぶん殴ってやるから心配しないで！」

そう言つてドアを叩く。

「はぁ〜い、どうぞ〜。開いてるわよー。」

と、男性の声が出た。わよ？

「失礼します。」

そう言つてドアを開けた先に待っていたのは

「はぁーいクリス。遅かったじゃない〜。元気だった〜？」

長い黒髪の短髪にお洒落な小さめの眼鏡、薄く塗った化粧が子顔を際立たせている。

服装は医者らしくYシャツネクタイで、白衣を着ているが。

「・・・。」

さつきから開いた口が塞がらないエリイ。

「あんら〜さつきからこの子どうしたのかしら？だいじょーぶ？」

そりゃ塞がらなくもなる。さつきから口調がおねえ言葉なのだ。

「まあ、そういうことよ。」

口をあけたままゆっくりとクリスの顔を見るエリイにそつと声をかけてやる。

「はぁいセロ。そつちこそ元気だった？」

しばらく固まったままのエリイをそつとしておきながらクリスが挨拶をする。

「あいかわらず化粧のノリがいいわね。ちょっと妬けるわー。」

「そんなことないのよ。これでも今日は悪いほうなのよ。やあねえ、年を感じちゃうわ。」

「それを言ったらあたしはどうなるのよ。」
「まるでこれが普通かのように話をする二人。」

「お、おか・・おか・・」
「やつと意識が戻ってきたエリイに」

「あら、もしかしてこの子が例のエリイちゃん？」
「そろそろ頃合だろうと思って声をかけるセロ。」

「オカマー!!!」
「やつと言えたのだろう、吐き出すように叫ぶエリイ。」

「失礼ね。これでも心は乙女なのよ。」
「そういう反応はもうなれてます、とばかりに綺麗に受け流す。」

「あ！す、すいません！」
「申し訳なさそうにあやまるエリイを良く思ったのか」

「素直な子ね。そういう子は嫌いじゃないわあ。」
「そう言っってウインクを返す。」

「良かったわねエリイ。気に入られたみたいよ？」
「う、うれしいです・・。」

「苦し紛れに言葉を出したが、身体は硬直したままだった。
もうちょっとエリイの反応を楽しみたかったがあまり時間も無いよ
うで」

「私の名前はセロ。セロ＝アートナイトよ。話はエルハイムから聞
いてるわあ。」

「軽く自己紹介をする。」
「エリイです！」

「まだ緊張しているのか、裏返しそうになりながら答える。」
「よろしくね、エリイ。」

「性格はあれだが本当に良い人そうなので、ちょっと安心したエリイ
だった。」

「さて、じゃあさっそく本題に入りましょうかね。」

そう言つて彼の前にあるデスクに広がっている書物（恐らく研究資料か何かだろう）をしまいだす。

「まあ、まずは気持ちを楽にしてねえ。」

セロが座っている椅子の横にもう一個椅子があり、そこにエリイを腰掛けさせる。

「大丈夫よ。何も心配は無いわ。」

少し怯えるエリイに優しく声を掛け、緊張を解かせる。

「は、はい。」

少しずつ慣れてきたのか、強張った顔がとけてくる。

「記憶喪失と聞いたのだけれど、名前以外には何も思い出せないのね？」

セロの問診が始まる。

「はい、気づいたときにはゲフエンの外に横になって。自分がなぜそこにいたのか、そもそもどういうものだったか

まったく思い出せないんです。」

ゆっくりとしゃべりだすエリイ。

「普通の行動は全く支障なさそうだけど、そいったところはどうか？」

「歩いたり、おトイレいたり、しゃべったり、食べたり。そういうのは自然とできるんです。でも記憶の部分というか。」

少し考え

「例えばさつき使った転送装置なんかも当たり前のように使われていますけど、それがどういうものかわからなかったり。」

「ふーむ、なるほどねえ。」

難しい顔をしながら、アゴに手を当て考えるセロ。

「一応ね、記憶喪失の原因で大まかな分類として2種類あるのよ。無言で頷くエリイ。」

「一つは外傷性。まあ有体に言えば、頭を思いつきり鈍器で殴られるとかね。その衝撃で一時的に記憶が抜け落ちることがあるわ。」

「でもあなたの場合それは考えにくいわね。痛いトコ無いでしょ？」
そう言われて頭をさするが特に痛い部分はでてこない。

「そしてもう一つが心因性。過重なストレスとかが原因で起きる記憶喪失ね。過去に心的外傷、トラウマがあったりすると、それをある一定以上

負荷を受けることで記憶が飛んでしまう現象よ。」

「またも無言で頷くエリイ。」

「あんたわかつてないでしょ。」

後ろで腕組みをしながら聞いていたクリスマスに言われギクツとし、

「はい、まったく・・・。」

と俯きながら答える。

「まあちよつと難しい話だったわねえ。」

とセロが言うと

「でも安心していいわ。どちらも一時的なモノがほとんどだから。

取り戻すには個人差があるけど直らない病気じゃないわ!」

エリイの手をぎゅつと握りしめ言い聞かせるように話す。

「よかったじゃないエリイ。そう心配しなくても大丈夫みたいよ!」

そう言つてエリイの肩を叩くクリスマス。

「は、はい!」

少し涙ぐみながら答えるエリイに

「一応外傷性じゃないか検査だけしときましょ。今日だけこの子預

かるけどいいわね、クリスマス。」

とセロが言つたので

「はいはいわかつたわ。明日迎えに来ればいいわね?」

時間を確認するクリスマス。

「ク、クリスマスさあ〜ん。」

情けない声で今にも泣きつこうとするエリイを宥めながら

「明日また迎えに来るから大丈夫よ。それにセロは女性に興味ない

から安心して。」

と頭をポンポンと軽く叩く。

「あまりフオローになってないわよ。」

クリスマスの軽口に軽く項垂れるセロ。

「じゃーゼロ、あとお願いしたわね。エリイ！また明日会いましょ！」

「また明日です、クリスさん！」

最後はちよつと元氣を取り戻したようだった。明るい声が聞こえる。

「ところでハルトちゃんは？」

「お尻隠して逃げてったわ。」

エリイを置いて研究所から出ると辺りはもう夕暮れ時になっていた。外門近くを歩いていたら時だった。ふと自分の背後に気配を感じる。

「だれ！？」

そう言つて研究所の方へ振り返るが、誰もいない。

「……？気のせい？」

一瞬嫌な予感が過ぎたが、考えすぎだと思ひまた歩き出す。

この時はまだ何も知らなかったのだ。

運命という残酷な現実……。

第2節
完

第3節(前書き)

読んで字のごとく、続きです！

第3節

第3節

男は必死になっていた。

もうすぐ約束の期日だ。間に合わなければ殺される。奴らは自分達の命などなんとも思っていない。まるで地べたをはいずる虫のように。

男は疲弊していた。

もう何日も眠っていない。まるで死刑執行を待つ囚人かのように、ただ静かに暗い部屋で息を飲んでた。

男は後悔していた……。

最初はたかが小娘一人すぐ見つかると思っ込んでいたが、自分の命すら左右することになるとは。

明日の明け方が少女を引き渡す期日である。今は夕方の6時を過ぎたあたりだ。今だに部下からの連絡はない。

今までは部下への威厳もある為にあせりを出さずにいたが、正直もうそんな余裕はない。

その体格のいい身体つきからは想像できないほどに精神が追い詰められている。

彼の名前はダグラス・ヴィルゴ。

このルーンミッドガッツ王国の首都プロンテラを活動拠点とする犯罪シンジケート集団とでもいえばいいか。

ギャングと呼ばれることもある。彼はそのボスと言われる。

この街で多発する犯罪、暴行・強盗・殺人・人身売買などは大抵がこの組織の一員だったりする。

裏の世界では結構名が知れた存在だ。

街で見かければまず誰も近づこうとはしない。彼が何もなくても

自然と道が開けていく。彼から遠ざかるようにだ。

なぜか、ただ単純に怖いからだ。因縁つけられ様ものなら末代まで苦しい生活をさせられるであろう。

泣く子も黙る下道中の外道と言えよう。

そんな彼が、死への恐怖に震えている。

銃口や刃物など何度も突きつけられてきたことはある。生まれてきてからの定めのようなものだ。そういう輩は大抵返り討ちにあっている。

だが、今回の相手はわけが違う。

そんなものは一切通用しないのだ。

彼が今まで積み上げてきた武力、プライド、財源など全てがボロボロと崩れ落ちていく感覚。

事実、崩されたのである。

本物の力というのを見せ付けられたのだ。

それ以来、ずっと奴らのいいなりである。

逆らえば、自分が殺される。

だからどんな手も使った。あらゆる犯罪に手を染めた。先ほど挙げ

たのはまだかわいい方もかもしれない。

それでも、今回は上手くいかない。

奴らが言ってきたのは実に簡単だった。

「少女を捜し、引き渡せ。」

これだけの文字に少女の写真。

今までの無理難題に比べれば朝飯前のようなものだ。

最初はそう思っていたのだ。

それがこのザマである。

だからと言って黙って死ぬ気はさらさら無いのだが。

彼には右腕とも言われる有能な部下がいる。

名をアイデンヴェルグ・リースリイという。

年齢はよく知らないが20〜30代ぐらいだろう。体つきは自分と反対で華奢だが、とにかく頭がよくまわる。

その豊富な知識と戦略で何度助かったことか。

すでに彼にとつて絶大な信頼を得ていると言つてもいい。

今回もリースリイが主で指揮をとってくれている。

これでダメなら打つ手無しか、どっか遠くへでも逃げるか・・・

そんなこと思っていた時である。

ドアを叩く音が聞こえる。

「入れ。」

もしかしたら見つかったのかもしれない、と内心はひやひやものだ。

「失礼します。」

ガチャツとドアを開け、痩せ型の白衣を着た男が入ってくる。

リースリイだ。

「報告します。ターゲットの居場所をつきとめました。」

簡潔に述べる。

「そうか。」

ヒゲを蓄えた口元を下品ににやつかせながら答えた。

やっとだ、やっとこの日が来たのだ。てこずらせやがってなどと思

いながら

「どこにいるんだ？」

あせる気持ちを抑えながら話を続ける。

「それが・・・」

リースリイは少しいいずらそうに間を置いた後

「聖魔研です。」

静かにそう答えた。

またやつかない所に隠れたものだ。

あそこは国立が故に警備が硬い。進入するのも一筋縄ではいかない

のだ。

「それに。」

リースリイが付け加える。

「あの女も一緒にいます。」

「女？」

誰かと思つて聞いたが、次の言葉を聴いた瞬間に戦慄が走る。

「クリス＝リンベルです。」

その名前には嫌なイメージしかない。

今までもさんざ彼女に邪魔されてきたのだ。

向こうはこつちの事など知らないだろうが、こちらの失敗の時には大抵彼女の名前が挙がる。

こちらからすれば疫病神の様なものだ。

「厄介だな……。」

重たいため息を吐きながら呟く。

「ご安心を。作戦はもう考えております。」

リースリイの心強い言葉が返ってくる。

「どうやらターゲットは聖魔研に泊まるようで。女も今は離れております。」

「そこで警備の薄い深夜に突入し、ターゲットを確保。そしてリミットである明け方にターゲットを引き渡します。」

言うだけならば簡単だ。

「大丈夫なんだろうな？」

万が一失敗すればもう後は無い。

だがリースリイはニヤリと笑いながら

「心得ております。もう少しの辛抱です。必ずやボスの元にターゲットを連れてきて見せましょう。」

そう言い、丁寧なお辞儀をしつつ部屋から出て行く。

リースリイの言うことだ。多分確信があるのだろう。

あいつはできないことは口にしない。それ故に信頼があるのだが……。

女の名前だけがいつまでも頭から離れないでいた。

「無い乳め。」

「んだとこらあ……！」

「ふえ〜〜。」

そんな情けない声を出しながらエリイはベッドに寝転がっていた。クリスと別れてからというもの、検査づくしの時間だった。

最初は検査着なんて言っただけで下に何も着れない布一枚みたいな薄い服に着替えさせられたと思ったら。

痛いことしないうって言ったのに採血はされるし、なんか変な機械の中にはいつて数十分じっとしてなきゃだしなんでか分からないけど視力や聴力なんかも検査されたし。

セロさんは「異常が無いかどうか見るだけよん。」なんて言っただけだ。

やっと戻ってきたのはもう午後の8時を過ぎたあたりだった。

ここはセロの研究室の奥にある寝室のような場所で、寝る為のベッドとちょっとしたテーブルがあるだけだ。そのテーブルの上に食事がおいてある。

「ごめんねえ、こんなところしかなくて。でもここの食事は意外とおいしいのよ?」

セロが部屋に入りながらそう言ってくる。

「もうくたくたです。」

ベッドにへたつと倒れながらエリイが返す。

「大丈夫よ、もう何もしないから、安心して。」

近くにある椅子に腰掛けながらエリイの為に買ってきた缶コーヒーを手渡す。

「コーヒーは飲めて?」

「あ、だいじょうぶです。ありがとうございます。」

重たい体を起こしながらそれを受け取る。

暖かかった、どうやらホットにしてくれたようだ。

それを飲みながら、ちよつと話づらそうにエリイが口を開く。

「あ、あの、クリスマスってどういう人なんです?」

「あら?どうしたの急に。」

セロが疑問に思っけて聞く。

「い、いえ。こんな見ず知らずの私にここまでしてくれて。今までこんなこと無かったもので……。」

少し俯きがちに答える。

「ああいう子なのよ彼女は。」

セロが優しく微笑みながら言う。

「何ていうのかな、おせっかい焼きって言ったら怒るわね、あの子。ようはほつとけない性格なのよ。」

「はあ、そうなんです?」

今一理解ができない。普通ならどう考えても自分はめんどくさい類に入るのに。

「あの子もね、昔色々あったのよ。まあ今もそれに苛まれてるものあるけどね、顔にはださないけど。」

「え？クリスさんも何かあったんです？」

エリイが驚きながら聞く。

「まあ、良い人生とは言えないわね。ここまでよく走ってきたものだよ。」

「そうなんですか・・・。」

少し沈黙の空気が流れる。

「まああの子はそんな理由であなたを助けたりなんかしないわ。もつときつと単純な理由よ。」

「単純な・・・理由・・・？」

「そう、ただ単に助けたかっただけ。それだけよ。」

「はあ・・・よくわからないです。」

難しい顔をしながらエリイが唸る。

「まああなたはラッキーだったと思うくらいでいいのよ。」

エリイの肩を軽く叩きながらセロが言う。

「どーセラッキーだったんだから大いに甘えちゃいなさい。その方が彼女も喜ぶわ、きつと。」

「そ、そんな安易な・・・。」

エリイが言う前に笑いながら部屋を出て行くセロ。

その際に遠くから

「あ、食事食べたらその辺に置いといていいわよー。もう今日は何も無いから安心して寝ていいわ。」

なんて聞こえてきた。

そこで目の前に食事が置いてあったことを思い出す。

結構前に置かれたのか、少し冷めているようだ。

「はあ・・・。」

ため息をつきながら、その食事をつつつく。

「あ、おいし。」

セロの言ったとおり良い味付けだった。

考えることは山ほどある。記憶がいつ戻るかわからないし、今後の事もある。

とりあえず今あれこれ考えたって何も出てこないの、セロの言った通り甘えようかな、なんて思いながら食事をとっていたエリイだった。

「たまねぎ嫌いです。」
「のこさず食べなさい……!」

その頃のクリスマスはどうしてるかと言うと

「全く変わらないはねーあなたは。」

何てエルハイムに言われながら飲んでいた。

ここはプロンテラのメインストリートよりちょっと外れに位置するバーのような居酒屋のようなところだ。こじんまりとした店内で、基本的には常連さんしかいないような個人経営の店だ。

薄暗い店内で、込み入った話なんかする際にはよく利用する。

まあ基本的にはエルハイムとしかこないが。

「うっさわいねー。あんたもぜんっぜんかわらないじゃない!」

女性が持つにはちょっと大きすぎるくらいのジョッキでビールを飲みながら叫んでいるのはクリスマスだ。

「どう考えたって今回の事は簡単じゃないわよ。別にあの子が悪いわけじゃないけど。」

对象的にエルハイムが飲んでるのは綺麗なピンク色したカクテルのようなものだ。

「記憶喪失なんてそんなすぐ直るもんじゃないのよ。そのへん考えてるの?」

多少酔っているのか、少し強い口調になりながら聞く。

「わかっているけどさあ。わかってるけどもさあ〜。」

ぶつぶつ呟きながらつまみをつつきながらクリスマスが答える。

「ほっとけなかつたんだもん。しょうがないじゃない。」

はあ〜と一際大きいため息をつくエルハイム。

「まあ……。あなたがそういう性格なのはわかってるけどね。」

半場あきらめたようにそう言う。

言ってもきかないのは昔からだ。最初の方は何かやらかすたびに注意していた物だが、ここ最近はとりあえず一言言うだけで強く言ったりはしない。無駄だからだ。

それよりも彼女がポ力をやらないように後ろから支援する方が彼女の為かもしれない。そう思ったのだ。

「エルハイムには感謝してるわよー、これでも。なんだかんだで手伝ってくれるんだもの。」

彼女から突然思いもしない言葉を聞いたのでちよつとドキツとした。もしかして気づかれた？

「俗に言うツンデレ？つばいよねー。」

「あんたに言われたかないわよ!!」「
違つたようだ。」

空気も読まなくせにたまに核心を突く時がある。

それが良い所でもあるのだが。

「で、結局どうするの？あの子これから行くところ無いわよ。」
カクテルに口をつけながら話を進める。

「ん〜。」

少し考えたあと

「フェイヨンにでも連れて行こうかと。」

「ぶはっ!」

思わずカクテルを口から噴出す。

「あんた今日それ多いわよ〜。」

あーあーもつたいたい、とした目でクリスがそれを見る。

「だ、だって!フェイヨンって言ったらあんたんとこでしょ!」

「何よ失礼ねー。ちゃんとしてるわよー、多分。」

実はフェイヨンにあるクリスが所属しているギルド、名前をヴァリアントユニオンと言うのだが、先に言ったとおりギルドマスターはハルトだ。もちろんハルト、クリス以外にも所属してる人はいるのだが。フェイヨンの少し外れに大きい集合住宅のような家がその

本部で、そこで共同で暮らしているのだ。マスターがマスターなので結構クセが強いが多い。

別に悪い人たちではないのだが。

「ああ、こうしてまた清楚な子が汚れていくのね……。」
軽く嘆くエルハイム。

「それどういう意味よ……。」

冷めた目で言い返すクリス。

「まあ、あなたの事だから別に心配はしていないけど。」
一つ間を置いて今度は真面目に話す。

「長いわよ。それに何かあるような気がするわ。」

女の感とでも言わんばかりに何かを含んだように。

「そうね。そしたらとことん付き合っまでよ。」

彼女の決意のようなものを感じた。

こうなったらテコでも動かない。

何が彼女をそうさせるのか。まあわかってはいるが。

「全く……。」

そう言い

「困ったことあったら、何かやる前にちゃんとあたしに相談するのよ。」

結局はこうなるのだ。

「ありがとーエルハイム！じゃーとりあえずここはおじっ」

「割り勘よ!!!」

クリスが言い切る前にテーブルを叩きながら叫んだエルハイムだった。

その時だ。

急にクリスの上着から着信音が聞こえる。

携帯コンソールだ。

「ん?」

不思議に思っただけでコンソールを覗くと見慣れた名前が書いてある。セロだ。

なんだろう、と思っただけで電話に出る。

「もしもし？どしたの？」

軽い感じで出たのだが

『クリス！いまどこ！？』

なにやら焦ったようにセロがしゃべっている。

「いまプロンテラ近くのバーだけど、どしたのよ。」

少し嫌な予感がして今度は真面目に聞く。

『いい、落ち着いて聞いて。』

「だからどしたの！？」

あきらかに声を荒げて言う。

『エリイがさらわれたわ。』

「え？」

あまりにも突然過ぎてコンソールを地面に落とす。

「どしたのクリス！何があつたの！？」

何事かと思つたのかエルハイムが尋ねる。

等の彼女は何も聞こえていないかのように唇を噛み締めると途端に席を立ち外へと走っていく。

「ちよ、ちよつとクリス！どこいくのよ！！」

もうエルハイムの声は聞こえていないようだ。

落としたコンソールからセロの声が聞こえる。

『クリス！聞いている？クリス！！』

メインストリートを掛ける。

もう何も耳に入っていない。

やっぱりあの時気にするべきだった。

自分も一緒に彼女といえるべきだった。

そんな後悔を頭に何度も巡らせながらも走る。

「・・・エリイ・・・！」

もう酔いなど当の昔に吹っ飛んでいる。

とにかく1分でも早く1秒でも早く彼女の元へと行かなければ。そう思いながら彼女が最後にいた場所、聖魔研へと走っていく。

聖魔研の外門へとたどり着くと、その大きい建物の一箇所に煙が出ている所が見える。

たしか、セロの研究室の近くだ。

なぜかわからないが外門の警備員がいなかったので、不思議に思いながらも走っていく。

正門を抜け、正面玄関へ。ここまで難なくこれたのが逆少し怖かった。

昼間の雰囲気とは打って変わって誰もいない、物静かな雰囲気な口ビルだ。

普通なら怖気づいてしまって足が竦んでしまいそうだが、そんなものは関係なかった。

急いでセロの研究室へと掛けていく。

ドアの前までたどり着くと勢いよくドアを開ける。

「エリイ!!!」

叫ぶ声も空しく、静かに自分の声が響く。

「もういないわよここには・・・。」

奥のほうから小さな声が聞こえる。

「!?!セロなの!?!」

声がるほうへと走っていく。

そこは見事に外へとぶち抜けられた壁と、その近くにたたずむセロの姿があった。

よく見るとケガをしているようだ。頭から血を流している。

「セロ!!!大丈夫!?!」

惨状を見て驚きつつ近づくとクリス。

「ごめんね……。まかされたつもりがこのザマだわ……。」
消え入りそうな声でセロがしゃべる。

「いいの、とりあえず傷の手当てをしましょう。」
そう言つて傷がひどい頭部へと手をかざし意識を集中させる。
手を纏つた白い光りが、創部へと染み込んで行く。

「ごめんなさい、あまりこつこの得意じゃないの。」
傷を塞ぐとまでは行かないが、止血効果にはなったようだ。流血が止まる。

「大丈夫よ。これくらいどうともないわ。」
そう言い、クリスの方へと向き直る。

「簡潔に述べるわ。恐らく襲つたのはヴィルゴファミリーの連中だわ。」

「え？あいつらが？」
思わぬ答えに少し動揺する。

「ええ。一瞬の出来事だったわ。」
呟くようにその時を振り返る。

「私はエリイの寢室の近くのところまで仕事をしていたわ。静かだったからもう寝ていたのかと思つたら。突然の爆発音と共にエリイの悲鳴が聞こえたから、何かと思つて寢室に行ったの。」

「そしたらもう壁は打ち抜かれ、黒ずくめの連中が二人気絶していたエリイを抱えて逃げようとしていたの。」

「こちらが反撃する前に、また何か魔術の様なもので爆発させられてね。気がついたらこのザマだわ。」

「そう。それで何で敵がヴィルゴファミリーだったの？」
気になって尋ねる。

「彼らはここいらでも有名な悪だからね。あいつらが決まっしてしている腕章、それがついていたのを見たわ。」

セロが答える。

誰がやったつてのを示すのがプライドなのかどうかは知らないけれど、奴らは必ず黒ベースに赤のデザインをした腕章をしている。

逆に言えば、その腕章をした者には皆近づこうとはしない。

「わかったわ、ありがとう。あとはあたしにまかせて。」

そう言っただけでまだ傷を負っているセロを近くのベッドへと座らせ、立ち去ろうとする。

「待ってクリス！一人で行く気！？」

セロが呼び止めるが、歩みを止めずこう言う。

「あたしね、約束したのよ。明日また会おうねって。」

そう言っただけでまた走り出していく。

道の途中でハルトらしき人物を見たような気がしたが気にする余裕などなかった。

思うことはただ一つ

「待っててね、エリイ。必ず助け出すから……。」

第3節 完

第3節（後書き）

あと第4節とエピソードで一心第1章は完結です。

第4節 s a c r e d m a d e n ' s e y e (前書き)

ついに第4節です、クライマックスです。

ちなみに第4節だけ題名がついてます。

主人公がやつと主人公らしくなりますよ！

第4節 s a c r e d m a d e n ' s e y e

第4節

あたりはまだ騒然としている。

研究所で何か起こった時は必ず自警団（プロンテラにある騎士団のようなもの）がやってくるのだが、まだ来ないようだ。追いかける事もできずに休んでいるセロのコンソールに一つの着信があった。

エルハイムだ。

『セロ先生！クリスそっちに行つてませんか！！』
声はあきらかに焦っている。

さつきまで一緒にいたのはエルハイムか、なんて思いながら「ええ、さつきまでいたわ。もう行つちやっただけど・・・。」
そっくりながら少し意識が揺らぐのがわかった。

止血されたとはいえ、結構ダメージを負ってしまったらしい。

『先生！大丈夫ですか！先生！！』
エルハイムの必死な声が聞こえる。

「ええ、こちらは問題ないわ。それより・・・。」
少し言葉につまりながら

「彼女を追いかけて。一人じゃ危険すぎるわ・・・。」
全てを託すように話す。

『追いかけてつて。どこいったんですか！！』

「多分、ヴィルゴファミリーの本部・・・。」
行くとすればあそこしか無いだろう。

そう思ったがもう意識が限界のようだ。

「あとは・・・まかせたわよ・・・。」

そう言つてコンソールを持った腕がダランと崩れ落ちる。

『先生！？せんせえ！！』

エルハイムの声が聞こえるがもう返せそうもない。とりあえず命に別状は無いだろう、仮にも医者だ。自分の診断ぐらいできる。

そう言い聞かせ、静かに眠ることにした。

その数分後には多数の足音が聞こえる。やっと自警団が来たのだ。最後に一人呟く

「クリス、絶対に助けなさい……。」

突然電話が繋がらなくなり一人焦るエルハイム。

ヴィルゴファイミリーといったらプロンテラでも有名なギャングだ。あんなところに一人で乗り込んで行ったらいくらクリスでも一気に蜂の巣にされてしまう。

「まったく言った傍から……！」

とりあえず埒が明かないので、エルハイムも本部へ向かうことにした。

その途中で服装がもの凄く派手な男に出くわす。

「あー！エルハイム！」

あっちから手を振っている。

無視しよう……。そう思ったが

何かひらめいたのか急に足を止め

「あら、ハルトじゃない、どうしたのこんなところで。」

まるで今気づいたかのように声をかける。

「いやさ、今さっきクリスっぽいのがあっちに向かって走っていくのが見えてなー。何か知ってるんじゃないかとおもってよー。」

どうやらハルトも何か気づいているようだ。真剣な顔をしている。

「じゃあ説明は不要ね。」

そう言っ

「お願い！一緒に来て！クリスが一人で行っちゃったのよ！」

「どこに!？」

思ったより大変なことだと思ったのか、声に熱がこもる。

「おそらくヴィルゴファミリーの本部……」

「本部だあー!？何でそんなところに!」

「あたしだってわからないわよ!でも彼女かなり必死な顔してたわ。」

エルハイムが思い出すように話し出す。

「そういえば、昼間いたエリイちゃん姿も見えなかったなあ。」

「ん?あなた彼女に会ったの?」

不思議思つて聞くと

「ん?ああ、昼間一緒に飯食つたんだ。」

と、言いつつ二人である結果を思いつく。

「ま、まさか」

「もしかして……」

今までの行動が合致したのか、二人して急に走り出す。

「ったく、話してくれりゃあいいのに。面倒な奴だ!」

走りながらハルトが悪態をつく。

「だからあたし達がいるんでしょ!」

何を今更とでも言うようにエルハイムが叫ぶ。

「まったくだ!」

彼らもヴィルゴファミリーがどうとかは関係ない。心配するのは友の事のみだ。

「お願い、早まらないで、クリス……!」

そう思いながら本部があるプロンテラ郊外へと走っていく。

「ん……?ここは……どこ……?」

目が覚めた先はさきほどのところとはまったく違っていた。

とても暗く、冷たい小さな部屋。

辺りは何も無い、家具やベッド、美味しい料理も無い。

窓も無く、目に見えるのは角のほうにある灯がともったろうそくが一本おいてある台だけだ。

「目が覚めましたか？」

遠くから声が聞こえる。

「全く、てこずらせてくれましたね。」

とても静かな声だが、何か怨念染みた物が込められている気がした。

「だ、だれですか！」

怖くなって叫ぶ。唯一の抵抗とばかりに。

「自分が誰だつて関係無いと思いますよ。エルクレスティア＝マクレガーさん。」

抵抗も空しく声のトーンは変わらなかった。

しかし、なぜ自分の名前を知ってるのか。

「え・・・どう」

「なぜ自分の名前を知っているか？とでもいいかげですなえ。」

エリイが言い終わる前に、それを見透かしたかのように男が言い返す。

「それはあなたが私達にとって大事な存在だからですよ。」

あたりまえでしょう？とばかりの声で言う。

「あ、あなたは私が誰だか知っていますか！？」

エリイが聞く。

が、男は何を言ってるんだとばかりに首を傾げながら

「あなたは自分の事がわからないのですか？」

逆に質問を返す。

「私、記憶が無いんです。自分が何者だかわからないんです！・・！」
もう藁をもすがるような、そんな悲痛な声で叫ぶ。

「き、記憶が無いですって！そんなバカなことが・・・。」

ここにきて初めて、男が動揺する仕草をみせた。

「何が起きたというのだ。これもミスなのか・・・。」

何か一人でぶつぶつ言っている。

エリイにはこの状況が今一理解できなかったが、一つだけわかる。この男は私の過去を知っている。

「私は誰なんですか！教えてください！！」

そう言つて男の声がする方へと行こうとするが、急に足が止まりその場に崩れ落ちる。

「え！？」

そう思つて足元を見ると、片足が鎖に繋がれていて身動きができない状態になっていた。

「あなたはもうどこへも行けませんよ？」

それを見て男が言う。

「あなたはこれからある場所へと連れて行かれるのです。いや、帰ると表現した方が正しいかもしれませんがね。」

何の感情もなく、文を読むように説明をしていく男。

「しかし記憶喪失とは思つてもみませんでしたね。もしかしてあのワードもお忘れに？」

男が聞く。

「あの・・・ワード？」

何の事だかさっぱりわからない。

もうさつきから何を言ってるか理解ができない。

頭を抱えてうずくまるエリイに

「ふむ。本当にわからないようですね。困ったものです。」

などと特に困つたような顔もしないでそう呟く。

「まあいいでしょう。記憶など後でどうとでもなります。とりあえ

ずあなたをあの方へと届けないと。」

そう言つてこつちへと近づいてくる音が聞こえる。

「ひっ！」

すごく嫌な予感がして勢い良く頭を上げ、声がする方へと睨みつける。

「こ、これ以上こつちへ来たら舌噛み切つて死にますよ！！」

多分自分は彼らにとって重要な存在なんだろうということは理解

ができた。

それはとてもいけないんじゃないか、だから私はあんなとこにいたんじゃないかと想像する。

であれば恐らく彼らに捕まってはいけない。そんな気がする。

案の定男は困った顔をして

「それは困りますねえ。」

と言い、手のひらを裏返して両手を上げると

「マクレガーさん、こっち見て下さい。」

と、突然名前を呼ばれたので彼の顔を見た瞬間である。

体が動かなくなり、うまく呼吸ができない。目の前が真っ暗になっていく感覚。

「あ……う……ああ……。」

声もまともにだせない。

体を起こすのもしんどくなり、ついには這いつくばってしまふ。

「今ここで死なれたんじゃないやそれこそ困りますからね。少し言うこと聞いてくださいね。」

男の静かな声が聞こえる。

何をされたのかまったくわからなかった。

男の目を見た瞬間、瞳の色が黒から青色ぼく変わったと思ったたらもう今のような状態だ。

思考すら許されない。完全なる束縛。

遠くなる意識の中で思うことは一つ。

「クリスさん……ごめんなさい……。」

はあはあはあはあ！！

思いっきり飛ばした為、少し息を切らす。

タバコをやめようかなとも思ったが、多分無理だと思ってすぐ考えるのをやめた。

クリスが今いるのは、ヴィルゴファミリーの本部と思われる邸宅のすぐ目の前だ。

玄関前には黒ずくめのスーツ姿の男が二人立っている。恐らく銃などを所持しているに違いない。

彼らは冒険者ではないので、剣や弓などは使わないが、その代わりに使い勝手のいい銃などを所持しているケースが多い。

正面から突っ込めばこちらが蜂の巣だ。

クリスも銃は所持しているが、魔物以外の者に向けるのはご法度だ。足とかぐらいいいじゃない、とも思うがダメなモノはダメらしい。軽く舌打ちをして、邸宅の側面へと回る。

どこか上手く進入できそうなところは無いかと捜していると、邸宅の後ろ側の方から、どう見ても手を招いている人がいる。

あまりにも不信に思ってそーっと近づくと、大体全体像が浮かび上がってくる。

緑髪に小さい体に似合わない大きい荷物をカートで運んでいる。

楓だ。

「な、楓！何でこんなところにいるのよ！！」

「しー！ばれちゃいます！大きな声はいけません！」

つい叫んでしまったのを必死で押さえる楓。

誰にも聞こえないように呟きながら

「な、なんでこんなところにいるのよ。」

「ご都合主義ってやつです。」

胸を張ってそう答えるので、楓のほつぺたを両方からひっぱりながら

「真面目に答えなさい。」

「いーらーいーのーれーすー！」

ひっぱった頬を離すと、ゴムのようにパチンと音がするかのように戻っていく。

「で、何でここにいるの？」

「たまたまみかけたんです。エリイさんらしき人を背負ってここに入っていく人たちを。」

ひっぱられた頬をさすりながら楓が答える。

「あまりにも物々しかったので、もしかしたらと思ってごつやって隠れて入口をみつけていたらクリスマスさんが来たのです。」

「ナイス楓！それで入口は？」

「こつちです。」

そう言つて楓に案内された場所に行くと、邸宅を囲うようにある外壁に、人一人入れる位の隙間がある。

「ま、まさか掘つたの？」

よく楓を見ると体中泥だらけだ。指は血が滲んでいる。

「ち、ちがいます！あつたんです！」

それを悟られたくないらしく、悪魔でそこあつたものだと言い張る楓。

その血まみれの指をそつと握り、白い光りを纏わせる。

これぐらいの傷なら治せる。

「あつ。。。」

「ありがとね、楓。」

楓の頭を軽く叩きその穴へと入ろうとすると

「あ、クリスマスさん待ってください！」

突如楓に呼び止められる。

「ん？何？」

「これ、持つて行って下さい。」

楓が手に持つている袋を覗くと大量のブルージェムストーンが入っていた。

「楓、これ、いいの？」

さすがに申し訳ないので一応聞く。

「いいんです！でも。。。あまり危険なことしないで下さいね？」

これから敵の巣に行くのに危険も何もないだろう、と思いながらも

「ええ、大丈夫よ。心配しないで。」

と、言い返す。

「それと。エリイさんを助けてあげてください。」
泣き出しそうな声で言う。

「あたりまえでしょ！その為に来たのよ！」
そう不安を払拭するように言い切ると楓が掘ってくれた穴へと潜り込んでいく。

穴を通って外壁の向こう側、内部へと進入するとそこは邸宅の裏庭部分に出た。

見つからないようにと身を低くして邸宅側への壁へと移る。

壁つたいに歩いて行き、兆度正面玄関の裏側、比較的警備の薄いと思われる裏口に向かって行く。

邸宅の壁の曲がり角、兆度影から裏口を見渡せる辺りまで辿り着き、
ばれない様にそうつと覗くと、

いた。やはりファミリーの総本山だ、そう簡単にはいかないか。

裏口の前に立つ黒服の男が一人。

このまま突撃しても難なく倒せるだろうが、援軍を呼ばれてはまずい。

一度身を隠し、腰のベルトに閉まってある銃を引き抜く。

もちろん打つことはできない。

だが、ある程度脅しにはなるはずだ。

一度辺りを見渡し適当な大きさの石を探す。

あった。

それを拾い上げ、裏口の男が気づくところに投げ込む。

カランツと石が外壁とぶつかる音がする。

「だれだ!!」

裏口を守っていた男の声がする。

音を不審に思っ近づいてくる男の足音を息を呑みつつ死角の壁際
で待つ。

額を冷たい汗が流れる。時間になると数秒と無いが、この時間が異様に長く感じる。

だんだんと足音が大きくなってくる。庭の草を踏み潰す音がやけに激しい。

「まだだ・・・。」

足音はさらに大きくなる。

もう少し・・・。」

大きくなつた足音が急に止まる。

今・・・！」

「止まれ!!！」

壁際から銃を構えた男がこちらへと姿を現す。

だがそこには誰もいない。

「ん？気のせいか？」

そう思つて戻ろうとした時である。

急に男の口が塞がれ、銃を持った腕が後方へと捻じ曲げられる。

その痛みで銃を落とす。

それと同時に背中に重い衝撃と足が浮き上がる感覚で見事に前のめに倒される。

全て一瞬の出来事だ。

そして後頭部より何か鈍いものを突きつけられる。

「打ち抜かれたくなかつたら大人しくするのね。」

いつもより低いトーンで男の耳に囁く。

「き、きさま何ものぐあつ！」

男がしゃべり終わる前に首の後ろ、兆度延髄のあるあたりを銃の柄で思い切り叩かれる。

その一撃で男は全身から力が抜け崩れ落ちる。

「だから大人しくしろつて言ったのよ。」

物の数秒で黒服の男を気絶させ、ガラ空きになった裏口へと走っていく。

裏口の扉の前まで辿り着き、ドア越しに身をよせ、ゆっくりと開ける。

人がいる雰囲気は感じられない。

音がしないようゆっくりとドアを開け、足音がしないように忍び足で邸宅へと入る。

そこで目の前の光景に違和感を覚える。

誰もいない・・・？

目の前は電気もついていない廊下が続いているだけで、警備でうるついているであろう者どころか、人一人いないように感じられた。不審に思いながらもその廊下を真っ直ぐ歩いていく。

考えている暇などないのだ。エリイが泣いている姿を思い浮かべただけで胸が締め付けられる気がする。

最悪のパターンが頭を過ぎるが、それを振り払うかのようにどんどん奥へと突き進んでいく。

暗い廊下を抜け、どこかの大広間のようなところに出た。

そこも明かりが消されている。

広間のあちこちにある窓から光る月夜だけがその部屋の大きさを表している。

「ここも・・・？」

違和感はどんどん疑惑へと変換されていく。

「まさか・・・。」

そう思った時だ。

「その、まさかですよ。」

突如大広間の二階部分、兆度下にクリスを見下ろせる所辺りから男の声がする。

それと同時に一気に部屋の明かりがつく。

「くっ！」

突然の部屋のまぶしさに目がくらんだが、すぐに視点を対応させ辺りに意識を集中させる。

あきらかにこちらに銃口が向けられている。

しかもそれも数十と言ったところか。

クリスの周りを囲うように、二階、一階と黒服の男達が一斉に銃を構えている。

「はめられた・・・!?」

唇をかみ締めながら悔しそうに呟く。

「いやはや、本当に乗り込んでくるとは思いませんでしたよ。」

大広間の二階部分にいる白衣を着た男が口を開いた。

「こういう形で会うのは初めましてになりますかね、クリス＝リンベルさん。」

丁寧なお辞儀をしながら男が言う。

「こういうもあーいうも、あなたに会うのは初めてよ。」

銃口を男に向けたままクリスが答える。

「あなたはそうでしょうけど、こちらも色々ありますね。こっやつてお迎えさせて頂いているのですよ。」

「そりやどーも手厚い歓迎ご苦労様。」

軽口を叩くが、その視線は男から一つも離さない。

「でもあなたに用はないの。」

今度はクリスから話す。

「では誰に?」

「エリイはどこ?」

さっきまでの軽口とは違う、殺気の籠った低い声で言う。

「エリイとはこの娘のことかな?」

突如白衣の男の後方より低い男の声がする。

「その声、ヴィルゴ!?」

「ボ、ボス!」

プロンテラでも有名な為、クリスでもわかる。

が、それよりも白衣の男の方が驚いたようだった。

「まあいいではないか。今まで散々てこずらせてくれたのだからな。」

そう言っつて白衣の男より前が出る。

年齢は50代くらいだろうか、隣にある男の倍あるだろうかという体格のいい体に、ヒゲを蓄えた口、髪をすべて後ろにしているあたりがさらに風格を漂わせる。

その男の横、両手を後ろ側にされ、手首を縛られた状態で男に掴まれている女性の姿が見える。

「エリイ！」

思わずクリスが叫ぶ。

「……。」

だがしかしエリイと思われる女性は何も答えない。

それどころかまるで焦点が合っていない様な、無機質な瞳をしている。

「ちよつと！！エリイに何をしたのよ！」

その変わり果てた姿に焦燥感を抱き、吠える。

「別に何もしていませんよ。少し静かになってもらっただけです。」

白衣の男が眼鏡の位置を人差し指で直しながら答える。

「どの道この女ともここでおさらばだからな。対面させてやっただけありがたいと思うのだな。」

両腕を縛られたままのエリイをぶつきら棒の前に突き出す。

「……。」

それでもエリイは反応しない。まるで自分がここにいないかのようだ。

「エリイ！！！」

なおも叫ぶ。

「エリイ聞こえる！？帰ろう！ね！？」

「……さん。」

意識が無いはずのエリイから微かな声が聞こえる。

「ほう？」

関心していたのは白衣の男だ。

「く……りす……さん……。ごめんな……さい……。」

今にも消え入りそうな声で、その無表情の瞳から小さな涙をこぼしながらエリイは呟いた。

「エリイ……。」

あまりにも見ていらなかったのか、それとも自分の情けなさを嘆いたのか。

クリスが俯く。

「はい、感動のご対面はここまでです。」

エリイの眼の前へと移動し、まるでクリスと壁を作るかのように阻む白衣の男。

「どちらにしろ、あなたにこの女は救えません。だってここで死ぬのですから。」

そう言つと片腕を真上へ上げる。

クリスを囲んでいた黒服達が一斉に銃口を彼女に向ける。

「死ぬ前に何か言い残した事がありますか？」

よほど余裕なのか、すぐ攻撃命令をしない。この状況を楽しんでいるかのように聞く。

「……さない……。」

俯きながらクリスが呟く。

その右手にはもう銃は握られていない。代わりに小さな布の袋がしっかりと握られている。

「何ですか？よく聞こえませんが。」

白衣の男はそれに気づいてはいないようだ。

「ゆるさない……って言つてんのよ!!!」

それと同時に先ほどまで大事に握られていた袋を頭上高くまで投げる。

その勢いで袋の中身から大量のブルージェムストーンがばらまかれる。

そう、先ほど楓からもらった物だ。

「ちい！撃てえ!!!」

そう白衣の男が言う前に

「遅いわよ!!!」

クリスの怒声がこだまする。

頭上高くまでばらまかれたブルージェムストーン一つ一つが青白くオーラのような物を纏い、四方へと分散し勢いよく降り注いでいく。まるで流星のように。

そのスキルの名をこう呼ぶ。シューティング・レイ。

読んで字の如く無数の相手へと降り注ぐ青い光。クリスの精神力スキルの一つだ。

まるで意識を持ったかのように無数の相手へと降り注ぎ、敵を無力化していく。

「ぐああ！」

「うおおー！」

体格のいい男達はその光の前に崩れていく。

さすがに体突き抜けるほど威力は高めていない。殺さないぎりぎりのところまで弱めているのだ。

人殺しは万国共通、大罪である。

「ちっ！小娘が！」

ヴィルゴが怒鳴り声を上げる。

「これでも成人してるわよひげづらあー！」

奇襲により敵の陣形が乱れている間に一気にヴィルゴとの距離を詰める。

一階から2階の踊り場へと跳躍。これも精神力を応用したスキルだ。

「エリイを放しなさい！」

その勢いでヴィルゴの顔を殴り飛ばそうとした時だった。

真横よりの銃弾がクリスの顔を横切る。

少し鼻の頭を掠めた為、そこから少し血が流れた。

「！？」

すぐに殴る体勢を立て直し、銃弾が飛んできた方角を見ると、先ほどの奇襲攻撃から逃れた黒服の男がこちらへ銃を向けているではないか。

回りをよく見ると後ろにも、壊滅しかけた1階部分にも数人の男達

がこちらへと銃を構え、発砲してくる。

「ちっ」

軽く舌打ちをし、すぐに銃弾対応する為に自身の体を覆うように光の壁を作る。

飛んできた銃弾はその光の壁に阻まれ、あらぬ方向へと飛んでいく。便利のように思えるが、これが長くは続かない。

一発2発ならば用意に防げるが、こう雨のように撃たれては数分ともたない。

それを知ってか知らずか、いくら阻まれようと撃つのを止めない黒服達。

これだけ撃って自分の後ろにいる、自分たちのボスやエリィは問題ないのかと後ろを振り返ると。

そこにはもう誰もいなかった。

しまった。逃げられた・・・。

ならばもうこんなところで立ち往生していないでさっさと後を追いたいのだが。

少しでも光の壁を崩したら蜂の巣だ。

少しでも身を屈めて当たらないようにするが、もうほとんどもたない。

元々この手の支援スキルは苦手なのだ。

こう言うのもベタだが、万事休すか・・・。

なんて思っていた時だ。

「だからいつも冷静に行動しろって言ってるのよ。」

銃声だけがする大広間に突き通った女性の声がする。

かと思えば、クリスを狙っている黒服の男数人の眼の前の地面が突如変化し、まるで溶岩のようにドロドロに溶け出し、

その亀裂から大量の火柱が天井へと昇っていく。

「うおおー!!」

何が起こったかわからずその火柱の前に尻もちをつく男たち。

「エルハイム!?」

クリスが思わず叫ぶ。

その瞬間のスキを狙ってか一人の男がクリスの頭へと狙いを定め、撃とうとした瞬間だ。

「スキだらけだぞクリス!! 久々の戦闘でなまったかあー!?」

そう言いつつ、その男の頭部を蹴り飛ばす派手な服装をした男性が一人。

「ハ、ハルト!?」

何で2人がここにいいのかさっぱりわからない。

「どうしてここに・・・」

「いいから早く追え!!!」

クリスの言葉を遮るようにハルトが叫ぶ。

「エリイが待つてるんでしょ! 急いで片付けてきなさい!」

今度はエルハイムがそう言うと同時に今度は大広間一帯に巨大な風を巻き起こし、爆風と共に黒服達の体勢を崩れさせ、武器を奪っていく。

「・・・ごめん!!!」

何か言おうとも思ったが、2人の好意を無駄にするわけにはいかない、とヴィルゴ達が逃げて行ったであろう方角へ走っていく。

「ちい! 追いかける!」

黒服の一人が叫ぶ。

「そうは・・・」

「させねえよ!!!」

ハルトとエルハイムがその行く手を阻む。

自分の身長ほどあるうかという大斧を全面に構え射程に入った敵をなぎ倒すハルト。

そしてその後方より精神力(魔力)を集中させ、火、風、地、水と多属性に及ぶスキルを発動させるエルハイム。

「この先は絶対に行かせねえよ!!!」

ハルトが叫ぶ。

「あなた達に恨みはないけど。彼女の邪魔はさせるわけにはいかない！」

決意に満ちた声でそう言うのはエルハイムだ。

2人が思うことはただ一つ

エリイを救えと・・・。

ハ：「あーまじめにやったら疲れた。」

エ：「やっと出番なんだからもうちょっとがんばりなさいよ!」

ハ：「もうないよ。」

エ：「え?」

奥へと続く廊下を走る。

まだ離されて3〜4分とたっていないはずだ。それでも一向に追い

つく気配がない。まさかもう遠くへ？

走りながらヴィルゴがさつき言っていた言葉を思い出す。

『この女ともここでおさらばだからな……。』

さらうぐらいだから、殺すということは無いはず。

と、いうことはどこか違うところへ移される？

そう考えていた時である。

突如廊下の壁際にある窓から日が差し込む。

日が昇り始めたのだ。

突然の事なので、驚いて窓の方を見ると、

その真下を走っているヴィルゴと白衣の男がいるではないか。

ヴィルゴの肩に背負われるようにしてエリィが運ばれている。

彼らが走っている先にあるのは……。

巨大な鉄の塊で覆われた馬車のようなフォルム。ただ先頭に馬はいない。

そのかわり塊の下の部分に大きな車輪が両はじに二つずつ、計4つ
ついている。

つい最近開発された精神力エネルギーを流用した機械、たしかカー

トと言ったか。

あれに乗られたら、走っても到底追いつけない。馬車なんかよりも

何倍ものスピードが出せる。

「まずい……！」

今から下に行ったんじゃないやどう考えても間に合わない。

じゃあどうする？

もちろん、答えは決まっている。

「!?!」

急に眼に入る朝日によって意識を取り戻す。

しかしぜんぜん地に足がついている感じがしない。浮いているよう
な気さえする。

それもそうだ、彼女は大柄の男に抱えられているのだから。

「ほう、もう意識を取り戻しましたか。やはり普通のヒトとは違いますね。」

大柄の男の隣の方より声が聞こえたので、振り向くと白衣の男が興味深そうにこちらを見ている。

「お、降ろして下さい!!!」

抵抗しようとするが、両手を後ろで縛られている為に身動きがとれない。

「悪いがこちらでも自分の命を守る為なんぞな。悪く思ふなよお嬢ちゃん。」

白衣の男とは違う、もっと低い声が聞こえる。

自分を抱えている大柄の男がしゃべったのだ。

前方の方を見ると、何やら大きい鉄の塊のような物が止まっている。あれに連れて行かれるのか……。

「安心して下さい。帰るだけなのですから。まあちょっと脳の方はいじくらせて頂きますけどね。」

白衣の男が気色の悪い表情をして言う。

この男の本性が少しわかったかもしれない、と思うと同時に襲ってくる恐怖に身が震えそうになる。

「私が・・・何をしたっていうんですか……。」
声を震わせながらすすがるように呟く。

「別にあなたは何もしていませんよ。恨むなら、そうですねえ、自分の運命でも恨んでください。」

おもしろがるように言う白衣の男。
どう抵抗しても無理そうなので、次第と全身の力が抜けていく。

「おや、もう終わりですか？」

ついに追い詰めたとばかりに笑う男。

「誰か・・・助けて・・・誰か……。」

もうほとんど誰も聞こえないような声で呟く。

頬を伝っていく涙が儚くも地面へと落ちていく。

思い出すのはここ最近のことだけだが、とても充実していた気がする。

優しい顔でほほ笑むエルハイム、とても陽気なハルト、そしてちょっと性格が怖いが親切なセロ。

なにより一番浮かんでくるのは、いつもは軽いノリだが一番に心配してくれ、優しく頭を叩いてくれるクリスの姿。

大粒の涙がどんどん溢れ出てくる。

「・・・リスさん・・・クリスさん・・・！」

悲鳴にも似た声でエリイが叫ぶ。

その瞬間だ

突然自分を抱えている大柄の男の頭が前方へはねていく感覚。その勢いで体ごと吹っ飛ばされ、自分も飛ばされそうなところをグイッと腕を掴まれ静止させられる。

後方から後頭部に蹴りをくらったようだ。

何事かと思っただけで掴まれている腕の方を見たら

「呼んだ？」

いつもの軽いノリで笑う彼女の姿があった。

「あ・・・あう・・・あつ・・・」

もう声にならなかった。

泣いていいのか、喜んでいいのかわからない。でも涙は溢れ出てきた。

「まってね、いまほどいてあげるから。」

そう言っただけで、エリイを縛っている両腕の縄をほどく。

「く、クリスさん！！！」

今度は声が出た。いままでの緊張から解放されたのか、大粒の涙を流しながら抱きつくエリイ。

「あーはいはい。わかったからわかったから。」

やはり照れ隠しなのか、軽い口調で答えるが視線はエリイの方へと

向いている。

「これで3回目よ、利子高いからね。」

「ええ!!!」

突然泣くのを止め、驚いた表情をしながらクリスの顔を見るエリイ。けれどもその表情はとても柔らかい顔をしているようだった。

「やってくれましたね・・・。」

ふと男の声がしたのでそちらを振り向くと白衣の男がこちらを睨みつけていた。

どうやら結構お怒りのようだ。

「何、そんなにそのボスがやられたのが気に入らないの？」

エリイを自分の後ろに隠しつつクリスが言う。

「ふん、こんな男どうでもいいのですよ。所詮捨て駒ですからね。」
突然妙な事を言った。

「捨て駒？」

怪訝な表情でクリスが問うと

「ええ、そうですよ！私がこんな街のゴロツキの部下なわけがないでしょう！私はもっと偉大なお人に就いているのですよ！！」

手を大の字に広げて白衣の男が言う。

「な、なによ急に。あんたの頭は蹴ってないわよ？」

さっきとあまりにも態度が違うので、ちよっと気圧される。

一方頭を蹴飛ばされたヴィルゴは遠くの方でのびている。

「まあいいでしょう。こういう時の為に細工をしておいたのですからね。」

白衣の男が突如指をパチンと鳴らした。

それと同時にさっきまで伸びていたはずのヴィルゴが、音も無く立ち上がり、こちらに向き直る。

瞳は鮮血のように赤い光を放っている。

「な、何したのよ。」

その奇妙すぎる動きに少し動揺しながらクリスが尋ねる。

「あなたはサタナキア、というものを聞いたことがありますか？」
白衣の男が薄らじみた笑いを浮かべながら聞き返す。

「サタナキア？」

聞いたことがない。

「ふむ、じゃあこう呼べばわかりやすいですかね？」

「悪魔・バフォメット。」

その瞬間、クリスに戦慄が走る。

知らないわけがない。かつてこの国を蹂躪した悪魔中の悪魔だ。
聖職者であればなおさらだ。

「あれは、なぜ突然と姿を消しましたかね？」

たしかにもう30年近くその姿は発見されていない。

まさか……。

そう思った時だ、突然ヴィルゴの体が膨れ上がったかと思ったら、
肌という肌が裂け、中から獣のような毛が生えた肌が露出してくる。
その大きさは何倍にも膨れ上がり、軽くこの邸宅の高さになるうか
という位大きくなったのだ。もう以前のヴィルゴの面影は全くない。
頭部からは山羊のような尖った大きな角が二本、両側頭部から生え
出ており、瞳は鮮血の如く赤い。そう、その姿はまさしく突然と消
えたバフォメットに近い。近いという表現を使うのは、所々が違う
だけでなく、伝承で伝えられたよりも何倍も大きく、一番の違いは
人間の支配下に置かれているという所だ。

「これが私達の研究作品ですよ。」

白衣の男がニヤつきながら話す。

「ま、まさかあの悪魔を支配したの……？」

「支配、とはちょっと違いますね。これはバフォメットの細胞をち
よつとこの男に移植しただけです。まあ色々改良はしていますが
ね。」

息を吐くように恐ろしいことを言う。

「さすがに支配するにはそれ相応のリスクが必要です。それではダ
メなんですよ。もっと簡単にしないと……！」

「それで生きた人間を媒体にしたってわけ……。この外道が。」
言っている意味はわからないが、人の道に反したことをしている、
というのはわかる。

「ク、クリスさん！来ます！」

エリイがあわあわ言いながら指差す方向を見ると、ヴィルゴだった
モノ、細胞を使ったのだからクローンとも言っべきか。

バフオメット・クローンの大きな右腕が振り下ろされようとしてい
た。

「ヴウワアアアア！」

もはや人間の声とは似ても似つかない声で叫びながらその腕を振り
下ろす。

エリイを抱えながらバフオメット・クローンがいる方とは逆の方へ
走りだす。

図体がでかい分よけるのは余裕だ。

しかし、

「参ったわね、あのでかさじゃ。」

走りながら悩むクリス。

「銃なんて今頃撃った所で蚊に刺された程度だろうしねえ。どうし
よっかエリイ。」

「わ、私に聞かないで下さい！！！」

クリスに抱えられたままのエリイが叫ぶ。

右へ左へと飛ぶ衝撃で、検査着のままだったせい、布がびらびら
とめくれ上がる。

それを必死に押さえながらエリイが言う。

「ど、どうするんですか！あんな大きいの当たったらぺしゃんこで
すよー！」

「うーん。」

などと唸っていると

「な、なんだあの馬鹿でけえ化け物は！！！」

突如邸宅の方からでかい声がする。

黒服達を片付けて後を追ったのであろう、ハルトとエルハイムの姿があった。

それを見つけたクリスが近寄る。

「おいクリス！なんだありゃー！！」

相当びつくりしたのかハルトがまだ叫んでいる。

「そんな大きな声ださなくても聞こえてるわよ。」

抱きかかえていたエリイをそつと降ろしながら答えるクリス。

「あの姿見たことあるわ、たしか・・・。」

そうエルハイムが言おうとした所で

「あーはいはい、もうその下りはさつきやったから後でやってね。」

めんどくさそうにクリスが言う。

「ちょ、ちょつと！少しは言わせてよ！！」

むきーとなって怒るエルハイム。

この状況なのに今までと変わらないやりとりについて笑ってしまうエリイ。

「何よ、なんかおもしろいことでもあったの？」

クリスがそれを見て聞いてみると

「い、いえ。なんか1日しかたつてないのになつかしくって・・・。」

笑っているはずなのに涙が出てくる。

「まったく、本当泣き虫ねえ。」

そう言いながらも軽くエリイの頭をなでる。

「どうでもいいけどあのてかいのこつち来るんですけど！！」

ハルトがまだ騒いでいる。

「さて、じゃあ取りあえずやっちゃいますか。」

そう言ってクリスがバフォメット・クローンの方へと向き直る。

「え！あんな大きいのどうやるんですか！！」

心配になりながら言うエリイに

「ハルト、エルハイム、エリイをお願い。」

後方にいる二人にエリイを託しつつ、軽く手を振る。

「やるのね、わかったわ。」

「オーケー！派手にぶちかませ！」

2人がそう言っているとエリイを抱えて邸宅の近くへと走っていく。

「く、クリスさん！！！！」

エリイの叫ぶ声が聞こえる。

だからこう答えてやった。

「エリイ！道はね、誰かに与えられるもんじゃないのよ！切り開くもんなの！！よくそこで見ておきなさい！！」

まるで今のエリイの心境を見透かされたようなそんな返事が返ってくる。

「大丈夫だエリイちゃん、なんの問題もねえ！」

ハルトの声がする。

二人ともクリスの心配をすることなく遠くへと走り去っていく。それくらい信頼しているのだ。

「クリスさん……。」

期待と不安が入り混じりながら、それでも目をそらさずに見守るエリイ。

「遠くへ行つたわね。」

後ろの3人を確認しつつ、前へと向き直る。

「仲間を守ってナイト気取りですか！実に殊勝なことですねえ！！」
白衣の男が嘲け笑う。

「大分悪役が板についてきたんじゃない？でもそんなフラグ立てて大丈夫かしら？」

一人になっても相変わらずの軽口を叩くクリス。

「フラグ？何のことです？」

「あなたには一生わからないわよ！」

そう言い意識を内部、自分の内側へと集中させる。

人間には精神力限界レベルという物が存在する。いってみれば自分の限界のようなものだ。精神力を力に変換して扱う者は大抵このレベルを引き上げる為に修行などを行う。例を挙げれば一般的な魔術

師、ウィザードと呼ばれるもので5。その下の下級魔術師で大体4が平均であろう。このレベルが上がるに連れて強力なスキルを扱うことができる。

ちなみにクリスの今の状態の限界レベルは7。すでに他の魔術師などを凌駕している。

が、それでも足りない。何しろ相手はあの悪魔だ。

いくらクローンといえども強化版といってるぐらいだ。並大抵のスキルでは通用しない。

敵の猛攻を避けつつ、さらに意識を集中させる。

人によって様々だが、自分のレベルを高める為に、抽象的な物が存在する。スイッチが切り替わる、などという表現もそれだ。

クリスの場合、それがレベルに応じて時計仕掛けのガラスのようなものを割ることによって一段階レベルが上がっていく。

思い描くのは丸型のガラスでできた時計が砕けていく映像。

1段階、2段階、3段階と限界レベルまで自分の精神力を高めていく。

徐々にクリスの身体に白く淡いオーラのようなものが纏い始める。

「何をしようとその状況は変わりませんよ!!」

男の声が聞こえるが、そんなものは気にならない。

6段階、7段階^{レベルセラン}・・・!

通常時での限界レベルに達する。

「それでこいつが倒せますか!!」

そこまでと悟ったか、クリスを叩き潰すようバフオメット・クローンに命令する。

「誰が、これが限界なんて言ったわよ!!」

一際大きい時計仕掛けのガラスが砕ける音がする。

その瞬間、身体を纏っていたオーラが一際激しくなり、燃え滾る炎のように煌きだす。

ガラスがどんどん砕けていく音。

その枚数合計で10枚。

「なんだと!!」

肉眼でもわかるぐらいに精神力の激しさが増している。

「これでもまだ倒せるなんて言える?」

すでに真っ直ぐ敵を見据えているクリスの右の瞳に赤い十字クロスが浮かび上がっている。

「sacred maiden's eye (神の奴隷の眼)」

遠くで見えていたエルハイムが咳く。

「え?」

エリイが聞き返す。

「彼女がかけがえの無いものと引き換えに手に入れた力よ。ああなつた彼女は、無敵よ。」

「かけがえのない・・・もの・・・?」

「よく見ててあげて。彼女の覚悟を。」

悲しそうな表情で言うエルハイム。

「はい・・・!」

何かを読み取つたのか、強く頷くエリイ。

「そんな力に騙されるものですか!!」

恐怖を払拭するように、バフォメット・クローンに命令する。

クリスの目の前に大きな巨体が立ちはだかり、その丸太のような腕を振り下ろす。

「・・・。」

真っ直ぐ敵を見据えたまま動かないクリス。

振り下ろされた腕がクリスを捉えようかとした瞬間。

一際輝く光の壁にその腕は阻まれる。

「ばかなっ!!」

先ほどの銃弾を弾いていた壁とは明らかに威力が違う。

この5メートル以上はあるかと思われる巨体が振り下ろした腕を弾いたのだ。しかも何のそぶりもせず。

「もう終わり？」

恐怖にも似た声がある。

「なら、こっちから行くわよ！」

そう言った瞬間に青白い光を纏った右腕を振り上げる。

振り上げた先、その拳から青いオーラが飛んでいったと思えば、巨体にぶつかった瞬間に爆散する。兆度十字を描くように。

その衝撃で、あの巨体が大きく後方へゆらく。

「グオオオオオオオオ！」

巨体が叫び声を上げる。

「ああ、あんた悪魔だったもんね。効果は抜群だと思うわよ。」

こんな状態でも彼女の軽口は止まらない。

そう、今放ったのは聖職者でも下級のスキル、ホーリー・ライトだ。

「どうやらみくびっていたようですねえ！」

一度バフオメット・クローンを下がらせ、力を溜めさせる。

そして両腕の前に突き出すと、突如空間に切れ目ができ、そこからバフオメットの象徴ともいえる大鎌を呼び出した。

その大鎌から黒く、混沌としたオーラを全身に漂わせている。

「本気で潰させてもらいますよ！クリスリンベル！！」

白衣の男が叫ぶ。

「あんたもう完全に悪役キャラに代わったわね！」

そう言い、上着に忍ばせておいた残り一個のブルージェムストーンを取り出す。

それを右手で握り締め、レベル10の精神力を注ぎ込む。

膨大な精神力を籠められたそれは、形態を維持できずに破裂する。

その時に発動する力をさらに自分の精神力で押しとどめる。

準備は完了だ。

「くるぞー！！」

今度はハルトが叫ぶ。

「くるって、何がです！？」

「クリスの決め技だよ！！衝撃にそなえろ！」

「え！？えっ！！」

戸惑うエリィを覆うように上からハルトが被さる。

「ものすげえのがでるからな、よく見ておくんだった！」

「は、はい！！」

いまだに戸惑いながらもその凄さはもう実感していた。

クリスの前に突き出された右腕、そこからあふれ出す精神力の塊で作られた風圧で遠くはなれたこちらまで爆風が降り注いでいる。

「悪役は悪役らしく・・・。」

目を瞑り意識を集中させながら呟く。

その間にも巨体から繰り出される大鎌がクリスを捕らえようとしている。

「審判を受けなさい！！」

クリスの目が開くと同時に、前面に繰り出された右腕が開かれる。

「セイクリッド・ジャツジメント！！」

その瞬間、空気を切り裂くかのような閃光がバフォメット・クローンを貫き、それより一呼吸遅れて放たれた莫大な精神力の塊が光の柱となって巨体を飲み込む。それとともに行き場の無くなった空気が、まるでその空間から弾かれるように四散し、爆風となって木々や外壁をなぎ倒す。

「グウオオオオオオアアアアアアア！！！！」

断末魔の叫びと共にバフォメット・クローンの身体が徐々に消えていく。

まるで光の柱に吸い込まれるかのように。

「人より造られし悪魔の王よ、潔く冥府へ還りなさい。」

その言葉と共に光の柱が消え、そこにあつたもの、バフォメット・クローンの姿はどこにもいなくなっていた。変わりにその場所に変身した影響なのか、体中が灰と化し風に吹かれてポロポロと崩れ去っていくヴェルゴの姿があった。

余韻に浸りたいがまだ気は抜けない。もう一人残っているのだ。そう思つて白衣の男がいた方角を見ると、もういない。

「あ、あれ？」

そう言つて辺りを見渡すと、先ほどまで邸宅に横付けされていたカーットのエンジン音がするのが聞こえる。

「しまった！また逃げられる！！」

追いかけてようと走りだそうとするが、急に膝が折れて、ガクンと崩れ落ちそうになる。なんとか寸前で踏みとどまったが、どうやら精神力を使いすぎたらしい。大きな力の代償とも言つべきか。

「だあー！こんな時に切れるなあー！」

大きな声で叫ぶが、もちろんそんな事で回復などするわけがない。

そんなことやっているうちにカー트가動きだし、白衣の男の声が聞こえる。

「今日はいいいものを見せてもらいましたよ！俄然あなたにも興味が湧いてきましたよクリス！！リンベル！！」

「いちいちフルネームで呼ぶんじゃないわよ！変態白衣男！！」

精神力が尽きかけていることを悟られないように、大きな声で言い返す。

「あつはつは！しばらく彼女の事は預けておきますよ！こちらも修正しなければなりませんからね！！」

修正？

「どーいうことよそれっ！」

必死に叫ぶが、どんどん離れていくカートにもう声は届かないだろう。

「またお会いしましょう！ちなみに私の名前はアイデンヴェエ・・・」
何か最後に言いかけてたが空気を読まないカートがどんどん遠ざかっていく為ほとんど聞こえなかった。

「アイデンヴェエ？アイデン！！ヴェエ？」

よくわからないが、まあ別にいいかってことでとりあえず深く考え

ないことにした。

それよりも、今この惨状で取り残されている自分達の方がまずい。あれだけの爆発や化け物が出たんじゃあ、自警団が来るのももう時間の問題だ。

説明するのもめんどくさいし、とっとと逃げてしまおう。

まだ走れる体力は残っているので、急いでエリイ達の下へと掛けて行く。

「……。」

さつきからずつと固まったままでいるのはエリイだ。

「おい、エリイちゃん？エリイ？」

ハルトが声をかけたり、顔の目の前で手を振ったりするが、一向に動く気配がしない。

「どうしたもんかね。衝撃で頭でもやっちゃったかね。」

とりあえずお手上げ状態で動向を見守っていると

「す……す……。」

何か聞こえてきた。ついでに体中が小刻みに震えているのがわかる。

「す？」

ハルトが聞き返す。

「すごおおおおおい！！な、なんですかあれ！！！！」

やっと思考が追いついてきたらしく、大きな声ではしゃぐエリイ。

「あれが彼女の力よ。まあ時間制限はあるけどね。」

隣にいたエルハイムが答える。

「それはウ　トラマン的な？」

「エリイ！それはいつちゃだめ！誰かに怒られるわ！！」

エルハイムが必死に止めようとするが

「おー。　ル　マン的な感じだなー。」

「ほとんど答えいつちゃってるじゃないの！！」

ハルトの一言に全て台無しにされた。

そんなやり取りをしていると遠くの方からクリスが走ってくるのが見える。

「あ！クリスさんが来ましたよ！！！」

エリイが真っ先に気づき、大きく手を振る。

が、当の本人はこの上なく必死な顔をしている。

「はれ？どうしたんでしようか？」

不思議に思っただけでエリイが首を傾げる。

「さあ？」

「どうしたのかしらね？」

他の二人もよくわからない見たいだ。

こちらに来るクリスをよくみると、邸宅の外の方へ必死に指を指している。

「外に何かあるのかしら？」

そう思っただけでエルハイムがそちらへ向くと

「・・・げっ！」

外壁の影から見える鎧と剣を持った連中が玄関前に集まるのが見えるではないか。

「や、やべえ！」

ハルトも気づいたらしくあたふたしている。

「ふえ？どうしたんです？」

何もわからないエリイが聞く。

「自警団よ！こんな状況見られたんじゃ、あたし達が犯人に間違えられちゃっわ！」

エルハイムまで慌てふためく状況だ、この場にいるのはよほどまずいのだろう。

「何やってのよあんたたち！！！」

3人に追いついたクリスがそう叫びつつ

「ぼさつとしないで逃げるわよ！！！」

抜き去っていく。

「え、えー！！置いていかないでくださいー！！！」

エリイが追いかけてよとすが、さらわれた時の格好の為、足も裸足のままで。上手く走れない。

「つかまつてる、エリイちゃん!!」

それを見たハルトがエリイを抱きかかえつつクリスの後を追う。

「それでどうやって逃げるの!もう正面玄関は自警団がいて無理よ!」

クリスに置いていかれないように必死に走りながらエルハイムが聞く。ここだけの話、エルハイムは運動が大の苦手だ。すでに息を大きく切らしている。

「あたしがここに侵入する時に入った穴があるわ!そこから逃げるわよ!」

邸宅を裏から回るように走り抜け、クリスが入った外壁の穴の方へと向かう。

そこでふと疑問に思う。

「あんだ達どうやって入ったのよ。」

「え、玄関に誰もいなかったからそのままぶち壊して入ったけど?何か問題でも?とでも言うようにハルトが答える。

「はあ、あたしの苦労は・・・。」

走りながら軽く項垂れる。

そうこうしてる内に外壁の穴の方へと近づいていく。

よく見るとそこに人影が見える。

「やばい!」

クリスが慌てて制止させる。

にも関わらず、その人影はこちらに気づいたらしくこちらに近づいてくる。

「ばれたかっ!」

エリイを降ろし、叩き潰していこうと戦闘態勢に入るハルト。

しかし、よく見るとその人影がやけに小さい。

しかも大きく手を振っているではないか。

「ん?」

クリスが気になって目を凝らしてみると、どうにもさつき見たような感じがする。

「おーい！早くこっちですよー！」

自警団に聞こえないくらいの声でこちらに呼びかけている。

そう、そこにいたのは楓だ。

「楓！？」

そう言いつつ、穴の方へと向かう。

「早く入ってください！自警団の人がきちゃいます！」

どうやらこの侵入口を守っていてくれたらしい。

「カエデさーん！」

そんなことは露知らず抱きつくエリィに

「わ、わかりましたから後にしましょう！バレちゃいますよう！」

照れながらも、早く入れとばかりに催促する楓であった。

無事に穴を抜け、邸宅の外へと出る。

自警団はまだこちらに気づいていないらしく、特にやってくる気配もない。

「何にも悪いことしてないんだけどなあ。」

ハルトがぼやくが、真犯人が逃走してしまった以上、上手くい訳しても聞き入れてもらえないだろう。

それにエリィのこともある。

彼女の素性がわからないとわかれば、簡単には返してくれないはずだ。

それに白衣の男が最後に言っていたことも気になる。余計に公には出したくない。

そう考えながら走っていると、街のメインストリートの所まで戻ってきていた。

とりあえずここまでくれば問題は無いだろう。

辺りはもう完全に日が照らし始めている。今日もいい天気みたいだ。「さて、と。」

皆が息を切らして休んでいる所に、涼しい顔をしながらクリスがエリイの方へと振り向く。

本当はもうぶつ倒れたくらい体力を消耗しているが、それを彼女に見せるのもまた心配されそうなので我慢する。

「エリイ！」

なるべく悟られないよう、元気な声で呼ぶ。

「は、はい！！」

地面に下ろされそのまま正座していたエリイが、突然呼ばれてビツクリしたらしく膝立ちになって答える。

「あなた、今後どうするか考えてる？」

答えはわかっているがとりあえず聞いてみる。

「え！あ・あ・あ・何も考えてなかったです・・。」

案の定、俯きがちに答えるエリイ。万が一何かしら決まっていたらと思ったが、大丈夫なようだ。少し安心する。

「よし！じゃあウチへ来なさい！」

少し照れくさくなりながらも、そう言う。

「え！？クリスさんちですか！？」

予想外の事だったらしく、顔をびくりしながら上げて聞く。

「何よ！。不満？？」

「ち、違います！すごく、うれしいです・・。」

きつとこの感情は嬉しさなのだろう。また涙が出てくる。

「で、でもいいんですか・・？素性のわからない私なんか・・。」

「そんな泣き顔で心配されてもねえ。それにもう素性も何もないでしよ。」

エリイの肩を優しく叩きながら答える。

「ハルト、まだ空きあったわよね？」

クリスが聞くと、合点がいったようにうなずきながら

「ああ。まだまだいっぱいあるぜ！」

ニカツと笑いながら答える。

「じゃあ決まりね。ああ、もちろん住むからには働いてもらうから

ね！」

「何でもしますー!!」

泣き顔から一転、満面の笑みでそう言うエリィ。

「今、何でもって言ったわね、ふふふ……。」

突如怪しげな笑みを浮かべるクリス。

「な、何をさせる気ですか……!」

ついうれしくて返事したものの、本当に大丈夫か少し不安になったエリィであった。

「で、何をすればいいんです?」

「まず掃除でしょ、それと洗濯に……。あつ料理できる?あと肩もんで。」

「家政婦ですか!!!」

「大丈夫だ、問題ない。」

「だからもうイーノックはいいですって。」

「今のあたしじゃないわよ?」

「え?」

「え?」

「「ほんものー!?!」」

「全く好き勝手やってくれやがって。」

誰もいなくなつたヴィルゴファミリーの邸宅の庭でそう呟いているのは、鈍く光る銀の鎧を身に纏い、暗い青色の髪が特徴的な男。

大体30台ぐらいか、くしゃくしゃになつたタバコを啜えながら震源地と思われる場所を調べていた。

「隊長!!!」

誰かが彼をそう呼びながら近づいてくる。

「ん、セシルか。」

呼び声に答えるようにその方へと振り返ると、これまた鎧を着た、今度は女性が現れる。

「ガルヴァデイス隊長!」

セシルと呼ばれた女性が男性の名前を言う。

「なんだ、みつかつたか?」

物々しく聞こえたので目的の物があつたのだろうか。

「隊長!ものすごく噛み易いのでアクセル隊長って呼んでいいですか!!!」

「今までのクールな空気返して!!!」

こいつはいつも俺が冷静な感じになるところボケてくる。

「なんて呼んでもいいから早くみつけてこい。」

頭を押さえながらしっしっしと追いやる。

「じゃあアクセルちゃん、でいいでしょうか!」

「もう隊長じゃなくなつてるじゃねえか!!!」

それに乗ってしまふ俺も俺か。

「え〜ダメですか?」

うるうる目で見つめてくる。

「ダメにきまつてんだろぅが！！早く行け！！」

残念そうに俯きながら邸宅の方へと戻るセシルを見送りながら、泣きたいのはこっちだよ、などと思いつながらもう一度頭の中を整理する。

とりあえず、また後手に回ったらしい。

彼の名前はアクセル・ガルヴァイス。プロンテラ騎士団（自警団とも言われる。）に所属している騎士だ。その中でも遊撃部隊という、単独で各地方での捜査をする権利を持つことが許される独立捜査権というのを持っている部隊の隊長でもある。この権利を持つものはそこまで多くなく、地方には地方の自警団が関与する物なのだが、この権利を持っている場合それに当てはまることなく捜査をできる。

いわゆる所轄の縄張りという概念が存在しないのだ。なぜそんな彼がここにいるかという、ある情報でヴィルゴファミリーが、彼の追っている組織と繋がりがあるといふ事を掴んだからだ。

だがついた時にはもう遅かった。

ここだけ竜巻でも起きたのかと思われるくらいに庭の草木が薙ぎ倒され、邸宅の外壁までもがボロボロに崩れている。今彼が立っている場所、そこから兆度円を書くように被害が出ている為、恐らくここが震源地だろう。

間違いない、これは戦闘の跡だ。

しかもただの戦闘じゃない。地面には自分の半身はあるだろうかという位大きな足跡が無数にある。

つまりそれくらい巨大な何かがあったということになる。それなのに邸宅の外に出ることなく、ここで消えているということは、それを打ち倒すくらいスキルを使ったということだ。

彼の心当たりではこんな芸当ができるのは一人しか思いつかない。

「今度は何やってんのかね、おじよーちゃんは。」
頭をポリポリ掻きながらとりあえず考えるのを止める。これ以上は何も見つからない。

あとは邸宅の方を調べているセシルを待つか。

彼女は一応あれでも副隊長だ。

遊撃隊というのは複数存在していて、アクセルはそれの1番隊になる。セシルはその副隊長だ。

大体が少数精鋭なので、ほとんどは彼女とペアで行動していることが多い。

今回もそうだ。

ただ、事件が起きたのが街内だったので今は他の仲間、普段街の警備を担っている人も集まっている。

「・・・たいちよ〜!」

また遠くから声が聞こえてくる。セシルだ。

まあどうせ何も痕跡など残してはいないだろうが、それを言っただけ元も子もないので一応聞く。

「見つかったか?」

「今日は魚じゃなくて肉が食べたいですー!」

「飯のこと何かきいてねえよ!!」

あれは真面目なのか不真面目なのかよくわからない。でもまあ一応副隊長なのだ。役には立つ。

「あ、ちなみに隊長が捜してたのは無かったですよ。全部爆破してありました。」

「先にそれを言え!」

セシルの頭をスパーンとハリセンのような物で殴る。何で持つてるかって? 必要だからだ。

黒髪のセミロングヘアがふらふらと揺れる。ひっぱたかれたショックで頭がふらふらしているのだ。

「ちゃ、ちゃんと調べてきたのに〜。」

まあこれはおいといて。

やはり証拠は残さない。また狐の尻尾探しからスタートだ。

「狐の尻尾捜してるんですか隊長は？」

「人の揚げ足とるんじゃないよ！！」

「またも頭をハリセンでひっぱたきながら思う。」

何かとても大きな事が始まっているのではないかと。

朝日がそんなことを告げているのでは無いかと思うぐらいにキラキラと輝いていた。

第4節 完

「この後は焼肉屋で反省会ですね！？」

「朝っぱらから食べるかなもん！！」

第4節 *sacred maden's eye* (後書き)

あとはエピソードでとりあえず完結です。第1章は。

エピソード（前書き）

とりあえずこれで第1章は終了です。

文才が無いものとりあえずやりきってみました。

最後まで読んで頂きありがとうございます。

エピソード

エピソード

「え、エルレスティア、ま、マクレガーです!!!よ、よ、よろしく
お願いします!!!」

室内に一際大きな声が響く。

「エル”ク”ね。」

すかさずにフロアに入るクリス。

今彼女達がいるのは、山岳の都市フェイヨンと呼ばれる街で、その
名のとおり、周りを山と木々で囲まれた自然豊かな街だ。

その後エルハイムと別れ、セロの事も気になったが「死にやしない
わよ、あんなんで。」というクリスの一言で、ハルト達が暮らすギ
ルド本部「ヴァリアントユニオン」があるフェイヨンへと来たのだ。
まあ歩いていくにはちよつと遠すぎるので、またカプラーサービスを
利用した。

もちろんハルトのおごりで。

「またかよ!!!」

「いいじゃない、あんた商売で稼いでるんだから少しは貧民に分け
てちょーだい。10Mゼニーくらい。」

Mとは100万という単位の簡略だ。ゼニーはこの世界の通貨単位
である。

「1000万なんか俺がほしいわ!!!」

などと言いつけていると

「いいからその方の紹介をしてちょーだい!」

突然横槍が入る。

「ああ、そうだったそうだった。彼女はエリィ、見てのとお・・・
あれ?」

ハルトが紹介しようとしてエリイの方を見たのだが、当の本人は緊張のしすぎか固まって動かない。

「み、見てのとおり超緊張している。」

冷や汗を掻きながらとりあえず現状を説明する。

「ほら、いつまでも固まってないで戻ってきなさい。」

クリスがエリイの後ろに回り両肩を叩くと、ぷはっ！と言って動き出す。

息まで止まっていたのか。

そんな状況を見ていてもたってもいられなくなったのか、エリイの前へと黒髪の女性が歩いてきて

「珠^{シユ} 梨燕^{リエン}よ！よろしくね、エリイ！」

とても元気な声で話しかけてきた。

身長はエリイよりも少し小さめで、長い黒髪を両端でお団子状にしてシニヨンキャップをつけている。

「彼女はこう見えても拳術の達人だ。下手に手出しできないぞ。」
と、ハルトが横から言う

「うっさい、黙れ！」

その顔に向けて軽く裏拳一発いれただけで、部屋の壁際へきりもみ状に吹っ飛んでいった。

「な・・・？」

その言葉を最後に彼は崩れ落ちたまま動かなくなった。

さようなら、ハルト。

「勝手に殺すんじゃないぞ！」

「まああれはおいといて。ボクのごことはリエンって呼んでね！ボクもエリイって呼ぶから！」

「は、はい！よろしくお願ひしますリエンさん！」

深々と頭を下げるエリイ。

「次はオレの番だね！」

へへっと照れながらエリイの前へと出てくる。金髪でツンツン頭が特徴の男性だ。表現的には男の子、だろうか。

「オレはアラン！クロエ！みんなはアルって呼んでるよ！よろしくね、エリィねーちゃん！」

「ね、ねーちゃん！く、クリスさん！私おねーちゃんになりました！」

よほど嬉しかったのかキャツキャツと喜ぶエリィ。

「やるわねアル……。エリィのツボを一瞬で押さえるなんて……」

「さすが年上キラー……」

クリスとリエンが口をそろえて呟く。

「まあとりあえず。」

ゴホンと咳払いを一つしながらハルトが間に入ってくる。

「あ、生きてたんだ。」

「死んでないわー！」

キチンとツツコミを返し話を続ける。

「とりあえず今はこんなところかな。たまにしかこない連中もいるからそれは追々紹介するとして。」

ハルトがギルドのみんなへと目配せを送る。

それに頷く連中。

「ほえ？」

一人何も知らないエリィが疑問を感じる。

「エリィちゃん！ギルド「ヴァリアントユニオン」へようこそ！！」

ハルトの掛け声と共にみんなが隠し持っていたクラッカーを一斉に鳴らす。

大きな音を立てて割れたそれは赤、緑、黄色など色取り取りの紙ぶきがエリィへと降り注ぐ。

「わぁー！！」

歓喜の声を上げているのはエリィだ。

「さあ今日は歓迎会よ。派手にやりましょ派手に。」

その部屋の奥にはたくさん料理や飲み物などが置いてあるダイニングテーブルのようなものがあった。

「やったー！今日は芋じゃないんだね！！」

「やめてアル！そういう悲しい事を言わないでください！！」

ハルトがアルの口を塞ぎながら奥へと引っ込んでいく。

なんかさらっと爆弾発言を聞いたような気もするが特に気にしないことにした。

「なんか、こんなに歓迎してもらっていいんでしょうか。」

うれしそうな顔をしているが、やはり少し不安はあるようだ。

「なーに遠慮してんのよ。今日からあんたもウチの一員なんだからこれくらい当然でしょ。さあ飲め飲め！」

すでに一杯ひっかけているクリスが無理やり酒を飲ませようとする。

「あんたは何未成年にお酒薦めてるの！いろいろな人に怒られるからダメ！！」

アルを塞ぎ倒したハルトが今度はクリスを止めに入る。

「なにをー！あたしの酒が飲めねーってのか！」

「タチが悪いよこの酔っ払い！！」

またハルトが泣きそうだ。

それを見ていたエリイがクスクスと笑う。

「あの人たちおもしろいでしょ？いつもあーなのよ。」

傍にいたりエンが話しかける。彼女も未成年なのか手に持っているのはジュースの類だ。

「だから、エリイも何も心配しなくて大丈夫だよ！ボクなら何かあったらいつでも相談に乗るからね！」

同年齢の友達のように気軽に話しかけてくれる。

「あ、ありがとうございます！お世話になります！」

そう言うと、すくっと立ち上がり

「じゃあさっそく最初のお仕事してきますね！」

と言って暴れているクリス達の方へと向かっていく。

一応仲介に入っているようだ。ただ、エリイの影に隠れてハルトが文句言ってるのはとても滑稽だ。

「こりゃ大変な仕事引き受けちゃったねえ〜。」

そう思いながら自分もちょっとお酒飲んじゃおうかなーって思った
リエンだった。

その夜、一人外のベランダで夜空を見上げていたエリイ。

ギルドのみんなは暴れまわったあげく、疲れて寝てしまったようだ。
ハルトさんとかが酔いつぶれたのはわかるが、なんでリエンさんか
らお酒の匂いがしたのかはよく知らない。

ここ最近の出来事が唐突過ぎたので少し整理してみる。

まず、クリスに会わなかったから今の自分はここにはいないだろう。
あの洞窟で魔物に食われていたに違いない。

それに自分をさらった連中、彼らは自分の事を知っているようだった。
た。

はつきり言つと怖い、またさらわれるんじゃないかと思うと夜も眠
れない。

でも、自分の記憶を知りたいという願望もある。

このジレンマに悩まされ、つい大きくため息をついてしまう。

「そんなにおつきなため息ついたら幸せ逃げちゃうわよー。」

ふと後ろから声が聞こえたので振り返ると、そこにクリスが立っ
ていた。

「あ、クリスさん。」

「隣、いい？」

そう言われたので頷くと、自分の隣に座るクリス。

「眠れない？」

「いえ、そういうわけじゃないんですけど……。何か色んな事が起
こりすぎて……。」

少し俯きがちに答えるエリイ。

「まあねえ。ここんとちよつとドタバタしすぎたわね。自分で言
うのもなんだけどまだ整理できてないわー。」

あははと頭を掻きながら言う。

「私、これからどうすればいいんでしょうか。」

多分言ったところで答えを知っているわけではない。それでも聞いてみた。

「エリイは自分の記憶を取り戻すんでしょう？」

クリスが逆に質問してくる。

「はい……。でも怖くて……。」

消え入りそうな声でそう呟く。

そう言うとき急にクリスが立ち上がり

「自分の道は自分で作り出す！ 邪魔する奴らがいたらかまわずぶっ倒す！」

そう言いながら右腕を前面に振るう。

「今日も言ったでしょ？」

エリイの方へと向き、微笑みながら言う。

「もしエリイが記憶を取り戻すというなら、それを邪魔する奴らはあたしが全部倒してあげるわ。」

「それが、今のままでいいならそれでいいじゃない。どっちにしろ進まなきゃいけないのよ。だからそんな頭下げないで上むきなさい、上。」

ほんとポジティブな人だ。

でもその言葉は毎回自分を勇気付けさせてくれる。

ただの言葉じゃない、とても暖かみがあるように感じさせてくれるのだ。

「は、はい！」

そう言っただけ顔を上げる。

「まあ今すぐ答えを出すわけでもないし。気長にやりましょ。」

またエリイの隣へと腰掛け、夜空を見上げる。

「今日も夜空は綺麗ねーちくしょー！」

「何で畜生なんです？」

「だって気に入らないじゃない。何も無い空でどーせ何も考える事もなくぼけーっと光ってんのよ。」

それは自己中すぎだと思えます、とつつこまざるを得ないエリィ。

「まあ、これからどれくらい続くかわからないけど・・・。」
話を戻すクリス。

「改めてよろしくね、エリィ。」

「はい！こちらこそよろしくお願ひしますクリスさん！」

長く遠い物語は、今ここで動き始めた。

エピローグ 完

エピローグ（後書き）

駄文を読んで頂きありがとうございます。

これからクリスとエリイの戦いが始まっています。

どこまで続くかわかりませんが、とりあえず頑張ってみようかと思
います。

質問、苦情など何でも受け付けますので気軽に感想お願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1357o/>

ラグナロクオンラインSS第1章 Girl Meets Girl！！

2010年10月12日10時46分発行